

<研究展望>はたしてアーリヤ人の侵入はあったのか ?ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭のなかで : 言語学・考古学・インド文献学

著者	長田 俊樹
雑誌名	日本研究 : 国際日本文化研究センター紀要
巻	23
ページ	179-226
発行年	2001-03-31
その他の言語のタイトル	Did the Aryan Invasions happen? In the rise of the Hindu Nationalism : Linguistical, Archaeological and Indological reexamination
URL	http://doi.org/10.15055/00000699

〈研究展望〉

はたしてアーリヤ人の侵入はあったのか？
ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭のなかで

——言語学・考古学・インド文献学

長 田 俊 樹

1 はじめに

まず、高校の世界史の教科書をおもいだしていただきたい。インドにまったく関心のない人でも、「紀元前一五〇〇年頃、アーリヤ人の侵入」という記述をおぼえているのではなからうか。その教科書の記述がいま変更をせまられている。近年のヒンドゥー・ナショナリズムの台頭のなか¹⁾、「アーリヤ人侵入説 (AIT= Aryan Invasion Theory)」に対する異議がとねえられている。また、考古学の発掘成果もあいまって、「アーリヤ人インド起源説」がインド国内でたかまっている。小論ではそうしたインド国内での動向をふくめ、この「アーリヤ人侵入説」をめぐる論争を紹介したい。

じつは、「アーリヤ人侵入説」の否定はふるくからある。シカゴでおこなわれた世界宗教者会議にインド代表として参加したことで

知られるヴィヴェーカーナンダは、「アーリヤ人侵入説」が確立する一九世紀末に、すでにアーリヤ人侵入説を批判している。また、二〇世紀にはいつてから、ヒンドゥー教の改革者とみられているオーロビンダは、今回の論争がおきるずっとまえに、つぎのように指摘している。

“It is indeed coming to be doubted whether the whole story of an Aryan invasion through the Punjab is not a myth of the philologists.” (Aurobindo 1956: 4)

しかし、このオーロビンダの発言やヴィヴェーカーナンダの指摘は、宗教者の信仰にかかわるものであって、科学的な根拠がうすいものとして、真剣にとりあげられることはなかった。近年の反アー

リヤ人侵入説を唱道する人々がこの発言を再発見 (Feuerstein, Kak & Frawley 1995: 154, Danino & Nahar 1996: 41) するまではまったくわすれられていたのである⁽²⁾。

反「アーリヤ人侵入説」が一九九〇年代に注目をあつめるようになったのは、ヒンドゥー・ナシヨナリズムの台頭と関連する。その台頭を象徴する事件が一九九二年におこる。それは、ヒンドゥー教聖地アヨディヤをめぐり、ヒンドゥー教のラーマ神の生誕地にイスラム寺院(バーブルのモスク)が建設されているとして、イスラム寺院を破壊し、ラーマ神生誕地を解放しようという運動が激化し、一九九二年の一二月には、ついにヒンドゥー過激派たちが実力行使におよび、イスラム寺院が破壊された、いわゆるアヨディヤ事件である⁽³⁾。日本でも報道されたので、ご記憶の方もいらっしゃるのではなからうか。このヒンドゥー・ナシヨナリストがいうところのラームジャナムブーミー(ラーマ神生誕地)解放運動のなかで、ヒンドゥー・ナシヨナリストによるインド史の書き換え要求がおこる。というのは、唯物史観にたつておくのインド人歴史家は、このラーマ神生誕地説が史実ではなく神話にすぎず、まったく根拠のないものとして、こぞって反対したために、ヒンドゥー・ナシヨナリストの納得のいくような歴史が要請されるようになってきたのである。その結果、この反「アーリヤ人侵入説」がおおきくクローズアップされるようになってきた。

この反「アーリヤ人侵入説」の旗手として、一躍有名になったのはデヴィッド・フロリー(David Frawley)である。もともとカトリック教徒アメリカ人であるフロリーがヴェーダやヨガを研究し、ヴェーダーチャーリヤ(ヴェーダの先生)の称号とともに、ヴァーマデーヴァリシャーストリ(ヴァーマデーヴァとはシバ神をさす)というヒンドゥー名をあたえられたのは一九九〇年のことだ。それ以来、ヒンドゥー教の偉大さをうったえたとともに、ヒンドゥー教の聖典ヴェーダを伝承してきた偉大なるヒンドゥー教徒の国インド(Bharat)というとらえ方につけて、ヒンドゥー教徒擁護の一環として、反「アーリヤ人侵入説」の唱道者となつていった。二〇〇〇年の二月から三月にかけておこなわれたフロリーの訪印では、バージェ首相と会談したばかりではなく、政権与党のBJP幹部と会談したり、デリー大学やジャワハルラール・ネルー大学(JNU)、インド工科大学(IIT)など、インドの有名大学で講演したり、マスコミ各社の取材も受ける歓迎ぶりであつた⁽⁴⁾。

この反「アーリヤ人侵入説」がヒンドゥー・ナシヨナリストたちに歓迎されているだけならば、反「アーリヤ人侵入説」は根拠のない、宗教対立をあおりたがるヒンドゥー・ナシヨナリストの煽動とみなし、冷静に対処すればよい。まして、言語学を専門とする筆者などがとりあげるべき問題でもない。ところが、この反「アーリヤ人侵入説」にはそれなりの根拠がある。とくに、さいきんの考古学

や形質人類学による成果はむしろ「アーリヤ人の大規模な侵入はなかった」とみる見解にかたむいている。のちにみるように、ヒンドゥー・ナショナリズムと関係のない考古学者ですら、この立場を支持しているのである。

この問題がたんなる政治問題ではないことはつぎの論文集からもわかる。その論文集とはErdosy (ed) (1995) *The Indo-Aryans of Ancient South Asia: Language, Material Culture and Ethnicity*. v. Bronkhorst & Dashpande (eds) (1999) *Aryan and Non-Aryan in South Asia: Evidence, Interpretation and Ideology*. だ。これらは「アーリヤ人」をめぐる諸問題を学問的に検証しようという言語学者、考古学者、インド文献学者によるところみである。このふたつの論文集には、政治的な立場がヒンドゥー・ナショナリストにちかい人々（たとえば、Eltis, Frawley, Rajaram, Talageriなど）は執筆してしない。政治的意図のない、純然たる学問的な（そういった立場はありえないと多く人々もいるが）論文集とみてよからう。そこで、小論ではこれら論文集を参考にしながら、「アーリヤ人侵入説」がどのようにたてられ、どのように否定されつつあるのか、みていこうとおもう。また、さいごには「アーリヤ人侵入説」に対する、私見もあわせてのべておきたい。

2 「アーリヤ人侵入説」の成立

「アーリヤ人」の名称はサンスクリット語 *ārya* 《高貴な》を語源とする。この語源についてはコンセンサスがえられている。ところが、「アーリヤ人」がだれをさすのかとなると、たちまち問題が生じる。「アーリヤ人侵入説」はこの「アーリヤ人」説と「侵入」説で、それぞれ問題をかかえているが、まず「アーリヤ人」の問題からみていこう。この「アーリヤ人」は、一九世紀に比較言語学が学問として確立していくなかで、印欧（インド・ヨーロッパ）語族の話し手をさすようになる。そこで、比較言語学史をかんたんによりかえりながら、この「アーリヤ人」という概念がどのように成立していったのか、みておこう。

一七八六年にカルカッタのアジア協会でおこなわれたウィリアム・ジョーンズによる、ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語が「共通の源」(Common source) からうまれたという内容をふくむ講演をもって、比較言語学の誕生とみる。比較言語学史をあつかった書物を見れば、かならずウィリアム・ジョーンズがさいしょに登場する。一九世紀にはいると、ポップとラスクによる印欧語比較文法研究により、印欧語族が確立する。一方、この時期に、南インドに分布するドラヴィダ諸語にもとうぜんのことながら、関心がよせられる。一八一六年に出版されたキャンベルのテルグ語文法書の

序文のなかで、エリスによって、南インドの言語がサンスクリット語とはことなることが発見され、一八五六年には今日でも十分に通用するコールドウエルの『ドラヴィダ諸語』あるいは南インド諸語の比較文法⁶⁾が出版されるにいたり、サンスクリット語とは起源のことなるタミル語やテルグ語などのドラヴィダ諸語がヨーロッパにも知られるようになる。こうした言語の相違がそのまま民族の相違として理解されるまでにはそう時間はかからなかった。

印欧語族の話し手としての「アーリヤ人」という概念を創出したのは、ドイツ出身で、のちにオックスフォード大学教授となるマックス・ミュラーである (Trautmann 1997: 172)。マックス・ミュラーは、さいしょ言語と民族 (あるいは人種) との区別をはっきりと自覚していたが、一九世紀の民族学の要請もあって、その区別がなくなっていく。ここにヨーロッパの人々とインドの人々をむすぶ、共通の「アーリヤ人」が誕生する。それと並行して、言語のこととなるドラヴィダ諸語の話し手を別の民族とみなしていく。また、リグ・ヴェーダを読むことで、つぎのような通説をうちたてたもの、ほかならぬマックス・ミュラーである。その通説とは、*Urasa* とよばれる「先住民」にかんするもので、比較的さいきん出版された、インド古代史の概説書である山崎元一 (一九九七) にもこう記述されている。

アーリヤ人は先住民ダーサを「黒い肌の者」と呼んでいる。そうした肌の色の違いが支配者・被支配者の区別を示したことは、「色」を意味するヴァルナという語が身分・階級の意味をもつことから知られる。さらにアーリヤ人は先住民を「牡牛の唇をもつ者」「鼻のない (低い) 者」とも呼び人種の違いを強調し、また意味不明の敵意ある言葉をしゃべる者と非難して、文化の違いを強調した。

このような先住民の主体は、ドラヴィダ系の民族であつたらしい。(山崎元一 一九九七: 五二)

さいごの「ドラヴィダ系の民族であつたらしい」という一節ははぶかれることがあるものの、インドについての本にはかならず登場する「先住民」の記載である。⁷⁾ この「黒い肌の者」「牡牛の唇をもつ者」「鼻のない者」というリグ・ヴェーダの一節が、はたして正しい解釈なのかどうか。ヒンドゥー・ナシヨナリストによる反「アーリヤ人侵入説」の主張のなかに、インド学がいかに西洋中心主義による人種主義にもとづいたものであるかという批判があるが、たしかにこれらの主張にも一理ある。一九世紀の人種主義にもとづく解釈が今日まで検討されなかったことじたいは問題である。なお、この「ダーサ」についてはのちに検討する。こうして、比較言語学の成果から「アーリヤ人」の概念が確立し、リグ・ヴェーダの一節

から「アーリヤ人」が先住民の「ダーサ、あるいはダスユ」を征服したという「事実」が認定される。ここに、「高文明が低文明を駆逐する」といった近代特有のモデルにもとづく「アーリヤ人侵入説」が定着することになる。簡略しすぎたきらいがあるが、これが「アーリヤ人侵入説」成立までのながれである。ウィリアム・ジョーンズやマックス・ミュラーについて、原典にふれることなくのべてきたが、小論のテーマはあくまでも、現在おこなわれている「アーリヤ人侵入説」をめぐる論争である。したがって、ヒンドゥー・ナショナリストたちの批判をあびている、マックス・ミュラーを中心とした一九世紀のインド文献学や比較言語学の成果については必要最低限、言及するにとどめておく。

ところで、この「アーリヤ人侵入説」は二〇世紀にはいつて「インダス文明」が発見されたのちも、ゆらぐことはなかった。それよりも、インダス文明研究の第一人者であったウィーラー (Wheeler 1947: 78-83) によって、インダス文明の衰退原因を「アーリヤ人の侵入破壊」によるものとみなす説が提唱されることで、「アーリヤ人侵入・征服説」が強化される。この説は、「アーリヤ人」の侵入時期とインダス文明の衰退する時期とがずれること、そして虐殺跡とされる骨の鑑定によると、けっして虐殺によるものと断定できないこと (Kennedy 1994)、『リグ・ヴェーダ』の記述をどこまで資料としてあつかえるのか疑問であること、の三点から完全に否定されて

いる (Possehl 1997a: 440-441)。しかしながら、ウィーラー説があたえた影響は今日でも尾をひいている¹⁸⁾。ヒンドゥー・ナショナリストたちがかならず標的にするのも、この虐殺をともなった「アーリヤ人征服説 (The Aryan Conquest)」である。これが「ノルマン人の英国征服 (The Norman Conquest)」をモデルとし、ヨーロッパ人との起源をおなじくする「アーリヤ人」が「野蛮人たち」を征服したといったストーリーを想起させ、まさしく西洋中心主義にもとづいた学説であるというのである。この指摘、それじたいにはおおいに賛同できる。こうした批判をまねかないためにも、ウィーラーの説が完全に否定されていることを強調すべきではなからうか。なお、武力をとまなうような「アーリヤ人征服説」は完全に否定されているとかがえ、小論ではあつかわない。

ここまで「アーリヤ人侵入説」、あるいは「アーリヤ人征服説」の成立過程をかんたんにとりあげてきた。それでは、ヒンドゥー・ナショナリストたちは、この「アーリヤ人侵入説」をどのように批判しているのだろうか。いちばんのおおきな批判は「アーリヤ人侵入説」がオリエンタリズム、あるいは西洋中心主義にもとづくものであり、帝国主義者によるインド支配の道具としてつかわれてきたこと、そしてキリスト教徒西洋人によるキリスト教絶対優越主義や人種主義の表象にすぎないことの二点である。そして、こうした発想のもと、でっちあげられたのが「アーリヤ人侵入説」であるとして、

うえにあげたフロリーはこのように指摘している。

“In short, the compelling reasons for the Aryan invasion theory were neither literary nor archaeological but political and religious—that is to say, not scholarship but prejudice.”
(Frawley 1994)

「アーリヤ人侵入説」は学問的ではなく、政治的宗教的なものであって、たんなる偏見にすぎない。これがヒンドゥー・ナショナリストの公式見解である。

ところが、こうした批判はヒンドゥー・ナショナリストだけのものではない。そこが問題を複雑にしている。たとえば、世界的な社会人類学者リーチも、「アーリヤ人侵入説」がいかに人種主義者のわくぐみ (racist framework) にもとづくものであるかを指摘している。リーチは論文のさいごを「このうべてしめくくっている」。

“The Aryan invasions never happened at all. Of course no one is going to believe that.” (Leach 1990: 245)

ここで、リーチが批判の対象としているのは、「アーリヤ人侵入説」をうみだした西洋中心主義的な人種主義者である。ところが、

西洋中心的人種主義者に反対する西洋のインテリならぬ、インドのヒンドゥー・ナショナリストたちによって、「アーリヤ人侵入はまったくなかった」ということがしんじられるようになったのである。皮肉なものである。西洋中心的人種主義に反対することが、結果的にはヒンドゥー・ナショナリストたちの「世界でいちばんふい文をもつヒンドゥー国家インド」樹立を補助することになるとは、リーチもゆめにだにできなかったのではなからうか。たしかに、リーチがいうように、イデオロギーとしての「アーリヤ人侵入説」には警戒しなければならないことはよく理解できる。しかし、バルボラが指摘するように、リーチはあまりにも歴史言語学の成果を無視しすぎている (Parpola 1995: 354)。そこで、小論ではイデオロギーとしてではなく、あくまでも実証レベルでの「アーリヤ人侵入説」の検討をおこなってみたい。

ヒンドゥー・ナショナリストたちの反「アーリヤ人侵入説」の根拠は、ほとんどイデオロギー批判に終始することがおおい。しかし、いくつかの事実についても異議申し立てをおこなっている。その事実への批判を大別すると、つぎの三つにわけることができる。それぞれの批判をかいつまんで紹介しておく。

(1) 言語学の問題。

- ・ 言語学は科学ではない (Rajaram 1995)。
- ・ 印欧祖語はサンスクリット語である (Misra 1992)。

・印欧祖語はインドではなされていた (Talageri 1993, Elst 1999)。

(2) 考古学の問題。

・アーリヤ人の大規模な移住の痕跡がない (Shaffer 1984, Kenoyer 1998)。

・「アーリヤ」人と馬の関係が指摘されてきたが、インダス文明の遺跡から、紀元前二三〇〇年前の馬の骨がみつかった。すなわち、インダス文明は「アーリヤ」文化と関連する (Elst 1999)。

・インダス文明のインド側の遺跡からはヴェーダのなかでえがかれている宗教的モチーフがみられる (S.R. Rao 1991)。

・インダス文明の担い手はヴェーダをつくった「アーリヤ人」であるという証拠に、インダス文字はサンスクリット語で読める (N. Jha 1997, Jha & Rajaram 2000)。

・インダス地域の遺跡はふるくは紀元前七〇〇〇年にまでさかのぼることができ、インダス文明はその時代から連続的に発達をとげてきたもので、「アーリヤ人侵入説」は考古学的な根拠にかける (Feuerstein, Kak and Frawley 1995)。

(3) インド文献学の問題。

・ヴェーダのなかに、移住を想定するような記述がない (Frawley 1994)。

・リグ・ヴェーダの成立年代はマックス・ミュラーが指摘し今

日まで想定されている紀元一五〇〇年ではない。ヴェーダに記載されるサラスヴァティー川の水がかれるのが紀元前一九〇〇年なので、それ以前である (Frawley 1994, Elst 1999)。

・ヴェーダ天文学による天の運行計算からいって、すくなくとも紀元前二〇〇〇年にはヴェーダはすでに成立していた (Feuerstein, Kak & Frawley 1995, Elst 1999)。

右にあげたうち、考古学者 (Shaffer, Kenoyer) による「アーリヤ人侵入説」をささえる「大規模な移住の痕跡」が考古学的な証拠にかけるという指摘は、もともとヒンドゥー・ナショナリストによる批判ではない。しかし、そうした考古学者の指摘を、ヒンドゥー・ナショナリストたちはおおいに利用しているので、ヒンドゥー・ナショナリストの批判一覧のなかであげておいた。それぞれの問題点について、言語学徒の立場にたって検討していきたい。

3 言語学による検討

ヒンドゥー・ナショナリストによる言語学批判のうち、ラージャラムは「言語学は科学ではない」と主張する。たとえば、つぎのような批判がなんどもくりかえされている。

“In the present circumstances, the question whether linguis-

tics is a science or pseudo-science becomes entirely moot. The really meaningful question to ask now is: can linguistics ever be turned into a science? On its record so far, real scientists as they get more familiar with that record are likely to grow increasingly sceptical of its claims. — To erase this fully justified scepticism of scientists towards them and their field, linguists must be prepared to go back to the foundations of their field and not just keep repeating their assertions” (Rajaram 1995: 222)

言語学はいちどだって科学であったこととはないとまでラージャラムはいう。ではなぜ言語学は科学でないのか。その根拠となるとかならずしも明白ではない。かれの論理ではつぎの理由による。「アーリヤ人侵入説」が「言語学による証拠」にもとづく主張しているが、「アーリヤ人侵入説」は実証的な科学である考古学によって否定されているのであるから、言語学は事実をかたっていない。したがって、科学ではない。いささかトートロジーの印象を否めない。「アーリヤ人侵入説」にかかわらないところで、言語学は科学ではないことを証明してくれば、もうすこし説得力があるが、その点にはふれられていない。また、ラージャラムの批判の対象となる言語学が一九世紀のマックス・ミュラーによるComparative

Philologyだけなのも説得力にかける。根拠が説得力にかけているにもかかわらず、「言語学は科学ではない。したがって、言語学によるアーリヤ人侵入説は成り立たない」という論理では、言語学者はだれも納得しないだろう。なお、ラージャラムはアメリカのインディアナ大学で数学の博士号を取得したのち、アメリカ航空宇宙局 (NASA) で働いている科学者だそうで、うへの引用に登場する“real scientists”にみずからを代表させている点がミソである。

つぎに、一九九〇年代における反「アーリヤ人侵入説」の口火をきった感のあるTalageri (1993) はいろんな意味で論外だ。あつかわれている資料がふるいうえに、比較言語学がどういう学問なのか、まったく理解していない。いちばんおどろくのは、ドラヴィダ語とインド・アーリヤ語はおなじProto-Proto-Indo-European (誤植ではない。プロトがふたつづく) から発展したといった論を展開しているが (Talageri 1993: 189-191) ‘プロトの意味がわかっていないのではなからうか。印欧語とドラヴィダ語を同系とみるのならば、Proto-Indo-Euro-Dravidianとでもよぶべきである。ドラヴィダ諸語の話し手のなかに、ヒンドゥー教徒がいるので、インド・アーリヤ諸語をはなすヒンドゥー教徒とドラヴィダ諸語をはなすヒンドゥー教徒が同祖である必要にかられて、論を展開している。そのために、言語学的事実とはかけはなれてしまっている。ヒンドゥー・ナシヨナリストたちのあいだでは、おなじヒンドゥー教徒であ

る「アーリヤ」と「ドラヴィダ」を二分するのは西洋中心主義者による策動であるとする論法が一般的だが、それには言語学は科学ではないという言説か (Rajaram)、『この二つの言語は同祖であると主張するか (Talageri)』、二つに一つしかない。印欧語族とドラヴィダ語族を、ほかのアフロ・アジア (セム・ハム) 語族やアルタイ語族とともに、ひとつにみるノストラティック大語族についてはまったく知らない⁽⁹⁾。

もっともやっかいなのはエルストである。このベルギー出身の研究者はアヨーディア事件から、ずっとヒンドゥー・ナショナリストを支持するイデオログとして活躍してきた。アヨーディア事件にかんするエルストの言動について、インド史家の小谷汪之はつぎのようにのべている。

外国人の研究者 (あるいはライター) が、このように、インドにおける一政治勢力に全面的にコミットするということはきわめて異例なことであろう。彼がいかなる動機から、このような行動に出たのか不明だが、彼は外国人研究者 (ライター) として、けっして踏み越えてはならない一線を決定的に越えてしまったように思われる。(小谷一九九三・二五二)

小谷がいみじくも指摘する「彼がいかなる動機から、このような

行動に出たのか不明だが」という点は、この反「アーリヤ人侵入説」論争においても、同様の感想をもつ。上記のノストラティック大語族をはじめ、言語学のさいきんの成果にもつうじ、仏語でしかまだ読めない Sargent (1995, 1997) を引用しながら、とにかく結論としては「アーリヤ人の侵入はなかった」という一点は堅持する。かれも、基本的には「印欧祖語インド原郷説」である。さいきんは、インド学インターネット上での論争では“Belgian Ass”とまでいわれ、個人攻撃もめだつ。論争じたい、さいしょから結論がきまっているのではあまり生産的だとはいえない⁽¹⁰⁾。

それでは、「印欧祖語Ⅱサンスクリット語説」と「印欧祖語インド原郷説」についてみておこう。じつは、世界的な歴史比較言語学者のホックがどちらの説もなりたないことを懇切丁寧に説明している (Hock 1999a)。それによると、まず「印欧祖語Ⅱサンスクリット語説」についていえば、まず母音の対応、ギリシャ語 ϵ, α, \circ とサンスクリット語 $\epsilon, *a, *o$ (言語学では推定形を *印でしめす) をたて、それらがサンスクリット語で ϵ となったと想定しなければうまく説明できないことを指摘している。また、子音対応についても、具体的な例をあげ、これら音韻対応によって想定できる音韻変化から、印欧祖語がサンスクリット語とはあきらかにことなることを指摘している。つまり、音韻対応と音韻変化という比較言語学の基本をしめすことで、「印欧祖語Ⅱサンスクリット

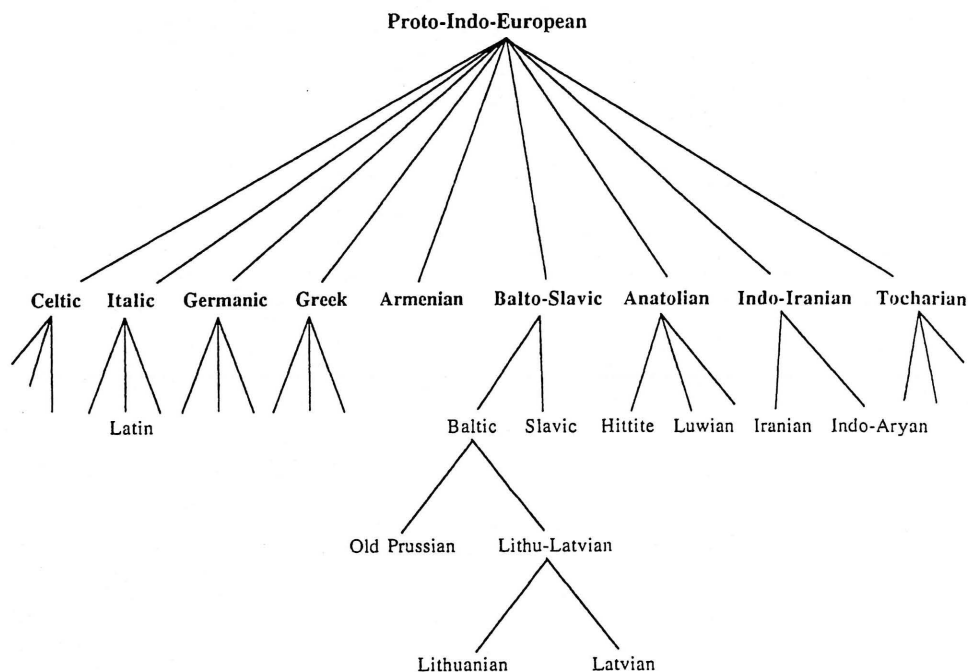


図1 印欧祖語系統図

ト語説」が成立しないと、初心者におしえるように説いている。一方、後者については、言語学による否定はなかなかむずかしいが、印欧諸語の方言差異をみることによって、それらがすべてインドからひろがっていったとしたら、その説明は不必要に複雑で、ほとんど理解できぬものとなるだろうと指摘している。

この反「アーリヤ人侵入説」をとえる人々による「印欧祖語Ⅱサンスクリット語説」および「印欧祖語インド原郷説」に対して、ホックの反論は模範解答である。歴史言語学をすこしでもまなんだ人にとっては、たいへんわかりやすい。しかし、言語学に無縁な人たちにとっては音韻対応などこまかい問題にはいると、理解しにくいとおもわれるかもしれない。なかには、ラージャラムがいうように、言語学がどこまで科学的なのか、疑問をもつ方々もいらっしゃるのではなからうか。そこで、言語学の立場から、基本的な点を確認する意味でも、印欧祖語について、もうすこしのべておこう。

まず、印欧祖語はつぎのような系統樹としてとらえられている(図1)。

この図1を説明しておこう。系統樹の頂点にある印欧祖語(Proto-Indo-European)から、時代とともに、分岐していったとみる。そして、分岐していったものが、それぞれケルト語派(Celtic)、イタリアック語派(Italic)、ゲルマン語派(Germanic)、インド・イラン語派(Indo-Iranian)などにわかれていったことをし

めす。インド・イラン語派はさらにインド（・アーリヤ）語派とイラン語派に分岐する。ただし、語派は印欧語族全体をかんがえるときに使用し、そのままインド・イラン語族やインド・アーリヤ語族と使用する場合もおおい。

ここで問題となっているのは言語と言語の話し手の関係である。

言語はものではない。かならず、話し手である人間がいる。人間の場合には、親から子へと遺伝していく遺伝子が存在することがよく知られている。ところが、言語はDNAのように遺伝していかない。親の言語とはまったくことなる言語を修得する子もいる。筆者のフイルドとするインドでは、両親の母語はムンダ語、しかし子どもはムンダ語ではなく、ヒンディー語（より正確に言えばビハール州共通ヒンディー語）だけを修得している。そんなケースが教育を受けたムンダ人のなかに、おおくみられる。したがって、印欧祖語の話し手のなかには、それ以前にはなしていた言語から、印欧祖語にのりかえた人々がいたとしてもふしぎではない。そうすると、印欧祖語の話し手が一つの民族を形成していたかどうかもはっきりしない^⑩。現在の英語の話し手も一民族ではないのと同様である。また、歴史的な変化についても同様で、印欧祖語の話し手とインド・イラン祖語の話し手、あるいはゲルマン祖語の話し手が同一の民族である可能性はすくない。そこが大問題である。ここまでのべてきたことはごくあたりまえのことをいっているのだが、実際には「印欧語

族」の話し手を、同一の文化、同一の民族、同一の人種とみなす表現があちらこちらに散見する。

たとえば、中央アジア研究の第一人者であった護雅夫（一九八四・八二―八三）は「インド―ヨーロッパ系人種の世界」という小見出しで、タリム盆地に六世紀以前にすんでいた人々を「インド―ヨーロッパ系人種」とよんでいる。インド・ヨーロッパ語族はなりたつが、インド・ヨーロッパ系人種はいかなるものか。「インド・ヨーロッパ語族に属する言語をはなす人々」を、インド・ヨーロッパ系人種とよびたかったのだとおもう^⑪。しかし、かつて、ナチスが「アーリア人種論」をうみだしたことをおもえば、慎重につかうべきではなからうか。「アーリア人種」を、「インド―ヨーロッパ系人種」とよびかえればすむ問題ではない。ここで、しつこいほど強調しておきたいのは、「語族」とはlanguage familyの訳であって、系統をおなじくする言語のグループをさすのであって、それらをはなす人々はささない。この「語族」という訳語が「漢族」や「文教族」のような「族」とおなじ用法なので、こうした混同がしばしばおこるのである^⑫。

これに関連して、堀のインド・ヨーロッパ民族否定論にふれておこう。堀は一連の論文のなかで（堀一九九〇・一九九五―Hori 1995）、こうのべている。「インド・ヨーロッパ人なる民族は過去にもなかったし現在にも存在しないというのが筆者の仮説である」

(堀一九九五・一八九)と。この仮説は基本的に正しい。ただし、その根拠は堀の前提とする「民族」なる実体は定義不能だからでも、政治的に利用されるからでもない。「インド・ヨーロッパ語」をはなす人々が単一民族ではないから、「インド・ヨーロッパ人なる民族」はいないのである。堀は「インド・ヨーロッパ人」を否定するあまり、比較言語学の基礎となす「インド・ヨーロッパ祖語」にまで否定的だが、こうした立場を容認する言語学者はまずいない。言語と民族と人種の混同がおこるから、問題がややこしくなるのである。これら混同をせずに、整理していくことを否定してしまつては問題の解決にはならない。あくまでも印欧祖語の話し手は多民族・多人種で多文化である可能性を視野にいれながら、言語という「事実」をあしがかりに、歴史を再構築することには価値をみいだすべきである。堀(一九九五・一八九)は「言語が意思伝達の手段である以上それは文化と同じく統合化されていくはずのもの」と指摘するが、これは言語に対する認識があまりとしかおもえない指摘である。日本文化は一〇〇年以上にわたつて、中国文化の影響下におかれてきたが、日本語はけつして中国語にはならなかったという事実をどうみるのであろうか。

「アーリヤ人」にもどうろう。「アーリヤ人」とはだれをさすのか。「人」とつくからには本来ならば、言語との関係がうすくなるはずだ。しかし、これまでのべてきたように、「アーリヤ人」という概

念は、一九世紀の比較言語学による印欧語族の発見とかかわっている。「語族」を人とみるのはたんなる混同ですませることができが、さいしょから「人」をさしているの、さらに複雑になる。すでに指摘したように、一九世紀から二〇世紀にかけては印欧祖語の話し手を、さらには印欧語族に属する言語をはなす人々、すべてにつかわれた。そこからは、「高貴なるアーリア人種」という概念がナチスのユダヤ人迫害につかわれた歴史がある。その反省から、いまでは印欧語族に属する言語の話し手につかわれることはなくなつた。ただし、ヒンドゥー・ナショナリストの著作ではこうした解釈が登場する(Talageri 1993)。

では、現在では「アーリヤ人」とはだれのことをしめしているのか。まず言語学的立場を強調する場合には、インド・アーリヤ祖語の話し手をさす。あるいは、ヴェーダを制作した人々をさす。しかし、言語学者のなかでも異論はある。たとえば、歴史言語学者の間喜代三はインド・イラン祖語をはなす人々を「アーリヤ人」とよんでいる。また、一般的には、そうした歴史的な存在ではなく、現代インド・アーリヤ諸語をはなす人々をさすこともめずらしくない。こうした言語学的立場だけではない。インド文献学の碩学、カイペルは“As a sociological term, ‘Aryan’ denotes all those who took part in the sacrifices and festivals” (Kuiper 1991: 96) とのべている。さらに、デーシュバーンデーは言語学的な「アーリヤ人」だけ

ではなく、文化的な「アーリヤ人」や生物学的な「アーリヤ人」までもふくめて定義している (Deshpande 1995: 78)。つまり、「アーリヤ人」とはだれのことをさすのかという問いに対しては、そのこたえは自明でもなければ、一つでもない。ここに、おおきな問題点がある。

こうした混同をふせぐためには、インダス文字の解説で著明なバルボラはつぎのような区別をたてている (Parpola 1995)。インド・イラン祖語の話し手としての「アーリヤ人」(Proto-Indo-Iranian or Proto-Aryan)、インド・アーリヤ祖語の話し手としての「アーリヤ人」(Proto-Indo-Aryan)、リグ・ヴェーダを書き残した「アーリヤ人」(Rgvedic Aryan)。こうした書き方をしなければ厳密とはいえないくなるほど、混同がいちじるしいのである。しかし、こうした混同を慎重に回避すれば、すくなくとも、言語学的にはインド・イラン祖語の話し手としての「アーリヤ人」やインド・アーリヤ祖語の話し手としての「アーリヤ人」、はたまたヴェーダをうみだした「アーリヤ人」は文化的にもかなり同質性の高い人々としてみていいのではなからうか。ただし、この「アーリヤ人」が色が白いか、おなじ身体特徴をもつような人間であったかどうかはわからない。人種主義にかたんしないことを明白にしていえば、いまのインド人のように、色黒の人から色白の人まで種々雑多な人々だったとかんがえるのがリアスティックだろう。

「アーリヤ人」に関連して、言語学の成果として特筆すべきは、リグ・ヴェーダに登場する「ダーサ」「ダスユ」がドラヴィダ語族に属する言語をはなすのではなく、インド・イラン語族に属することがあきらかになったことである。というのは、この *dasā* に対応する語彙がイラン語派にもあり、あきらかにインド・イラン語族と関連がある。ただし、こまかくいえば、おなじインド・アーリヤ語族に属する言語か (Parpola 1988, 1995, Erdosy 1989)、あるいはイラン諸語をはなすスキタイ民族 (風間一九九三) か、意見がわかれている^④。また、中東のシリアにある古代のミタンニ王国 (紀元前一五〇〇年—紀元前一三〇〇年) にのこる文献から、この王国の王たちがインド・イラン祖語に近い言語をはなしていたとみられ、インド・イラン祖語からインド・アーリヤ祖語とイラン祖語が分岐する以前に、インド・イラン祖語にちかい言語の話し手である「アーリヤ人」が移住したこともあきらかになっている (Tieme 1960, Parpola 1988, 風間一九九三)。「アーリヤ人」をどう定義するかという問題がこのころのもの、言語学的にいえば年代的な混同を極力避けることで、「アーリヤ人」の痕跡を追うことができる。その点だけは強調しておきたい。

比較言語学が印欧祖語の原郷問題に貢献できるのは、言語的先史研究 (linguistic Palaeontology) といわれる方法である^⑤。印欧諸語を比較することによって、印欧祖語時代の語形と意味を確定するの

が比較方法である。そして、印欧祖語の語彙を研究することによって、印欧祖語の故郷の位置を推測していく。たとえば、よく例にあげられるのは「ブナの木」である。再構された印欧祖語の単語 **bhā(n)g-*《ブナの木》から、印欧祖語のはなされていた場所にはブナの木があったとかんがえ、「ブナ」がはえている地域に印欧祖語の原郷を推定する。それが言語的先史研究である。しかし、この研究にはおのずと限界がある。まず、語彙は「言語のもっとも不安定な、変化の急激な部分」(高津一九九二・一九一)であるし、「手がかりとすべき根拠が常にはなはだ薄弱で、種々の解釈を許す」(高津一九九二・一九七)場合がおおいからだ。こんど、この方法によって、画期的な発見がなされ、印欧祖語の原郷が解明されるチャンスはほとんどなく、考古学的な証拠とともに、研究されてはじめて、言語的先史研究がいかされるのである。

言語的先史研究では、印欧祖語時代の文化や社会についてあるていどのことはいえる。しかし、まったく特定できないのは年代や場所の問題だ。つまり、印欧祖語の話し手はいつごろ、どこにすんでいたのか、という問題である。かつて、言語年代学(*glotto-chronology*)とよばれる方法論で、言語の分岐した年代がわかるとかんがえられた時代もあった。^⑩しかし、いまでは言語年代学の有効性は否定されてしまったので、言語学、それじたいの方法論で、時代を確定する方法はない。したがって、印欧祖語の年代について、

まったくコンセンサスはない。たとえば、風間(一九九三・一八五)は印欧祖語の年代を「せいぜい(紀元前Ⅱ長田補注)二千五百年という数字に留まらざるをえない」という。しかし、筆者がみるかぎり、この年代はかなりあたらしい。さいきんの印欧語についての概説書では紀元前五〇〇〇年(Campanile 1998: 21)や紀元前四五〇〇—二五〇〇年(Mallory 1989: 127)、歴史言語学の教科書では紀元前三〇〇〇年(Lehmann 1992: 313)や、紀元前四〇〇〇—三〇〇〇年(Hock 1986: 594)、*いむばんふるい*年代は紀元前一万年(Dolgopolsky 1988, 1993, Raftery 1998)、印欧語とアフロ・アジア語などとの系統関係を想定するボン・ハートは紀元前七〇〇〇年(Bonhard 1996: 105)などなど。おどろくほどの諸説紛々である。^⑪歴史比較言語学の入門書のなかには、「つぎのようにのべているものすらある。

“the chances of determining the date of Proto-Indo-European with any degree of certainty are very poor.” (Hock & Joseph 1996: 532)

また、印欧祖語の年代と同様、印欧祖語の原郷についても、つぎにあげた風間(一九九三)の図2を参照していただければあきらかなように、なかなか解決されない。

こうした問題を解決するためには考古学のたすけがどうしても必

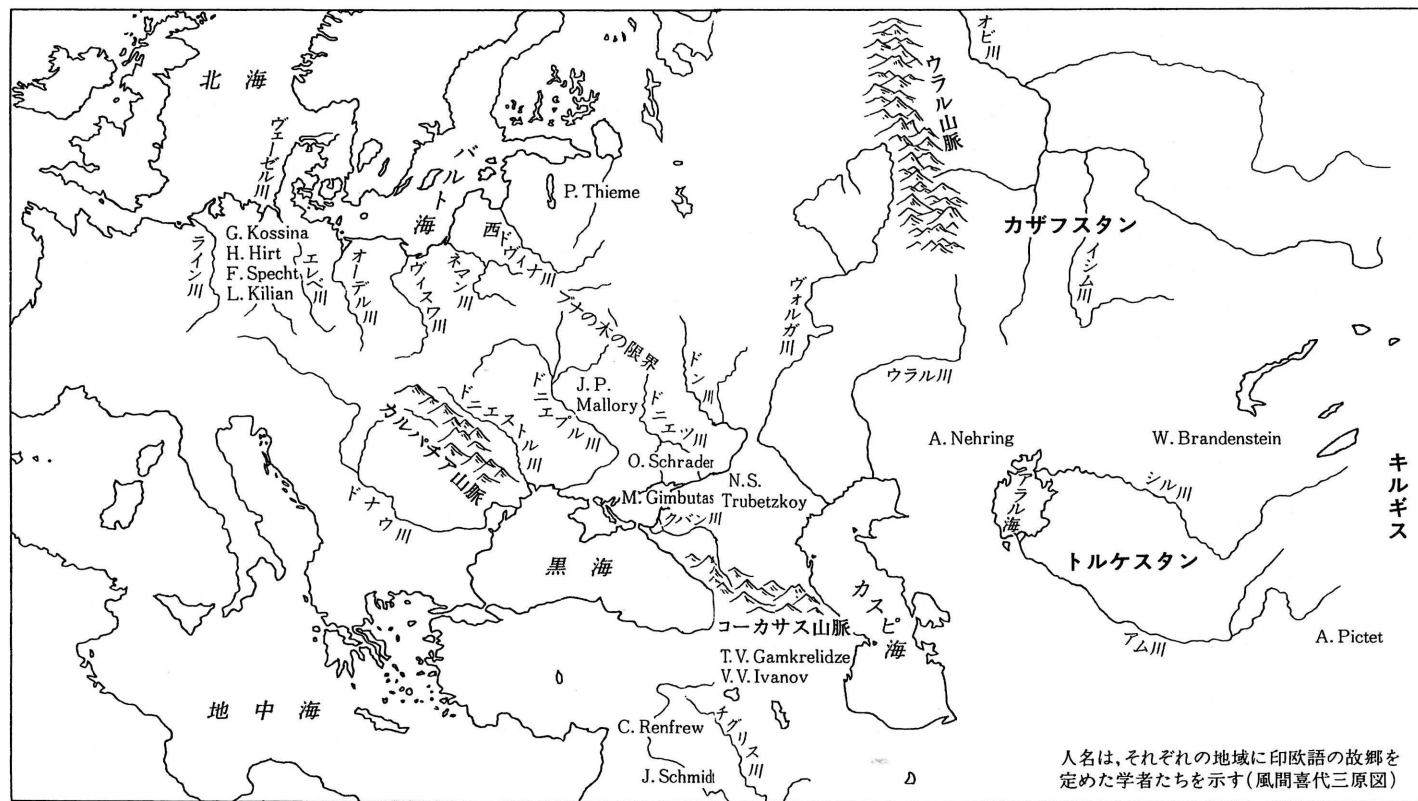


図2 印欧語の故郷をめぐる諸説

要なのである。げんに、原郷問題で発言するのは「クルガン文化」との関連を主張するギンブタスにしろ、レンフルーにしろ、ほとんどが考古学者である¹⁸⁾。印欧祖語の原郷がきまり、インド・イラン祖語の原郷やインド・アーリヤ祖語の原郷がきまらないと、「アーリヤ人」がどこからどうインドにはいつてきたのかはわからない。しかし、まえにもいったように、インドを印欧祖語の原郷とかがえるにはその後の印欧語族の分派をはなす人々の動きをうまく説明できない。原郷について、いろんな場所が提案されているが、それぞれの主張にはそれぞれの根拠があり、あくまでも、もっとも蓋然性のたかく説明可能な場所がえらばれている。蓋然性がひくく、説明も複雑かつ理解しにくい場所は風間の図にも登場していない。

印欧祖語の原郷や年代が言語学だけでは、なかなか確定できない。だからといって、手をこまねいているだけではない。意欲的な研究もある。それはジョハンナ・ニコルズの研究である。彼女は純粋に言語学の立場で、言語学的特質をいくつかあげて、その分析を通して、言語のどんな特質が変化しにくく、残存しやすいかを研究し、言語変化のメカニズムをさぐっている (Nichols 1992, 1997a, 1997b, 1998a, 1998b)。それによると、まず言語の拡散しやすい地帯 (spread zone) と拡散しにくい剰余地帯 (residual zone) にわけられる。拡散地帯のうち、とりわけユーラシア大陸のステップ地帯では、およそ一五〇〇年—二〇〇〇年の周期でことなった言語が拡散したと

みる。中世のモンゴル語の拡散、一世紀頃のチュルク語の拡散、紀元前二〇〇〇—一五〇〇年頃のイラン語の拡散、そして紀元前三五〇〇—三〇〇〇年頃の印欧祖語の拡散、さらには紀元前五〇〇〇年頃の先・印欧語 (Pre-IE) の拡散まで予測している。その拡散にもなつて、農業、家畜術、乗馬技術なども人間とともに拡散したとみる。このユーラシア大陸のステップ地帯における言語寿命の自然周期 (a natural periodization of linguistic life) を言語拡散のメカニズムと考えたのはニコルズがはじめてである。しかし、元時代のモンゴル語の拡散から、つぎの周期にいたる以前に、ソ連によるロシア語の拡散があったことをおもうと、こうした周期がどこまで妥当なのか、素朴な疑問も浮かぶ。それぞれの問題点とはかくとして、Locus (祖語の広がり) の中心。地震の震源地のような場所)、Range (祖語の広がり)、Trajectory (祖語の語彙がひろがっていく弾道曲線) という用語で語族の移動メカニズムを探ろうとするニコルズのころみは、可能性をひめた研究といえるのではなからうか。

そのニコルズに触発され、いろんな学説が提出されている。マロリーはインド・イラン祖語の話し手がバクトリア・マルギアナ考古複合体をつぎぬけて、南へ移住していったさまを文化弾 (Kulturkugel) とよび、文化弾の構成は言語を中心に、社会組織と物質文化からなるとする (Mallory 1998)。こうした弾丸モデルによって、インド・イラン語派の南への拡散をモデル化している。また、メイ

ヤーは言語アムバー(Sprachamöbe)とよんでいる(Mair 1998)。アムバーの核を印欧祖語の原郷とみて、偽足のように広がっている部分がインド・イラン語派とみなすモデル図である。いずれも、インド・イラン語派の拡散をいかに説明するか、苦勞していることがよくわかる。

印欧祖語の年代や原郷、そして拡散のメカニズムなど、言語学だけではなかなか解決できない問題が山積している。こうした問題に対し、たしかに言語学では限界がある。そのことははっきりとしておいたほうがよい。しかし、言語学の限界を強調するあまり、印欧語族などという概念は西洋中心主義者による解釈にすぎず、インドを植民地統治するための策動であると結論づけるとしたら、まったくのでたらめである。言語学が音韻対応や比較文法でやってきたことは、西洋人がおもにきずきあげてきたことにはまちがいないが、たんなる解釈ではない。だれもがあとづけ可能な事実からなりたっている。それは、インドの古典語であるサンスクリット語は西洋の古典語であるギリシャ語やラテン語と共通の印欧祖語から発展していったという事実である。そうした事実を確認したうえで、インド・イラン祖語から分岐して、インドへひろがっていったものがインド・アーリヤ祖語となり、さらにはサンスクリット語となっていた事実も理解しなければならぬ。それが「アーリヤ人」の移住をともなったものなのかどうかについては、言語学はこたえがだせ

ないが、「人」の移動をともなわないで、言語だけがひろがっていくモデルでもたてられないかぎり、インド・アーリヤ祖語の話手である「アーリヤ人」の移動を想定するのがもっとも理解しやすいのではなからうか。のちにのべるように、考古学的には「アーリヤ人」が大規模で移住した痕跡はみられないので、「アーリヤ人」の移住のプロセスについては考古学と矛盾しないようなモデルを想定すべきであらう。

これまでの論をまとめると、つぎのようにいえる。言語学の立場からいえば、インド・アーリヤ語族に属する言語をはなす「アーリヤ人」が移住してきたことは、ほぼまちがいない。ただし、ここで留意しなければならないのは、この「アーリヤ人」は現代の「インド人」や「アメリカ人」と同様、単一民族・単一人種である必要はないという点で、このことは強調しすぎても強調しすぎることはない。一方、年代的に言えば、はっきりと紀元前一五〇〇年に固定することは無理である。これだけを確認して、言語学による検証はおえる。考古学の主張とのギャップはのちにのべる。

4 ヴェーダ文献をめぐって

ヴェーダ文献についてはたぶん解釈の問題である。ヴェーダ文献はいつごろ成立したのか。サンスクリット語でかかれた文献をどうよむのか。つまり、どう翻訳、解釈するのか。そうして解釈され

た記載が史実なのかどうか。これは日本の古事記など、古典神話をあつかうときにいつも直面する問題である。日本の文献はたかだか千数百年前のはなしであるが、インドの場合はそれからさらに千年以上さかのぼる。とりわけ、ヒンドゥー・ナシヨナリストがいつも問題にするのはリグ・ヴェーダの成立年代である。インド文献学の大家であった辻直四郎（一九六七：七、一九七〇：五）が指摘するように、リグ・ヴェーダは紀元前一二〇〇年頃という成立年代が定説化しているが、ヒンドゥー・ナシヨナリストたちは天文学や神話上のサラスヴァティー川が紀元前一九〇〇年にかけてしまったことなどを理由に、成立年代を紀元前四千年紀（Est 1999: 117）、あるいは考古学的常識をかんぜん無視した紀元前一〇、〇〇〇年（Sinha 1999）といった主張すらみられる。

ここでも、歴史言語学者ホックがこれらの主張をことごとく論破している（Hock 1999b: 166-167）。たとえば、天文学による計算によつて、紀元前三〇〇〇年にリグ・ヴェーダの成立年代をたてられるという主張に対しては（Rajaram 1995: 41-43）、これまでの研究によれば、天文学による年代がけっして一致するわけではないという点を、ヴェーダ索引（MacDonnell & Keith 1912: 1: 422-425）によつて確認し、ラージャラームの計算が絶対的なものでないことを指摘している。また、サラスヴァティー川については、ヴィッツェル（Witzel 1995b: 343）によるリグ・ヴェーダの地理的データをまとめ

た表をあげ、アフガニスタンにもサラスヴァティーがあるとして、紀元前一九〇〇年に水がかれてしまったサラスヴァティーだけがサラスヴァティーではないことを指摘している¹⁹⁾。

ただし、ここでもリグ・ヴェーダ成立年代になると、研究者の見がわかれる。ヴィッツェルは七〇〇年の幅をもたせて、紀元前一九〇〇年から紀元前一二〇〇年においでいる（Witzel 1999a: 338）。また、インド人学者は紀元前一〇〇〇年という数字をはじきだしている（Ghosh 1965: 208）。右にあげた、ミタンニ王国の成立年代が紀元前一五〇〇年で、このころにリグ・ヴェーダが成立し、インド・アーリヤ祖語をなす「アーリヤ人」がインドに広がりはじめたという公式的な図式はあるものの、これらがコンセンサスをえられたものとしていないことだけははっきりとしている。

ところで、現在では定説となっている「黒い肌の」「牝牛の唇をもつ」「鼻のない（低い）」先住民という記述についても、ホックは疑問を呈している。それによると（Hock 1999b: 150-161）、リグ・ヴェーダのテキストから *kyśinā* 《黒い》という単語をぬきだし、その意味を慎重に検討した結果、それが肌の色や民族のちがいをしめたものではなく、民衆の感覚にもとづく相対的な表現にすぎない点を指摘している。また、*visśiprā* 《牝牛の唇をもつ》や *anās-* 《鼻のない》については、リグ・ヴェーダにおいて一カ所だけにあらわれる表現であると指摘したのち、前者の複合語のうち、*śiprā*

は《唇》だけでなく、《あゝ》や《ほほ》、さらに《頭飾り》を意味するし、*anus-*は*a-*「否定接辞」+*nas-*《鼻》と解釈できるだけでなく、*an-*「否定接辞」+*as-*《口》、《口がない》、つまり《ことばがうまくしゃべれない》とも解釈でき、Geldner (1951) も Mac-Donnell & Keith (1912) も後者の解釈を支持しているとのべる。

ホックの解釈の方が妥当性がたかいようにおもわれる。²⁰ ホックの解釈をうけいれない人々も、すくなくとも、こうした通説がけっして唯一の定訳ではないことだけはわかりただけなのではないだろうか。リグ・ヴェーダに登場する「ダーサ」や「ダスユ」を解釈するさいに、あらかじめ、人種や民族のちがいで理解しようという意図があったため、こうした訳が通説としてひろまってしまった。そうした可能性を否定できない。人種主義の源泉ともいえる通説をもうすこし検討する時期にきたことだけはまちがいないだろう。

残念ながら、筆者にはリグ・ヴェーダを原文で読む力もなければ、ヴェーダ文献の成立年代を推定するだけの知識も能力もない。したがって、ホックのヴェーダ解釈の妥当性を検証することはできない。しかし、歴史比較言語学者を代表して、ホックがヒンドゥー・ナショナリストの主張を懇切丁寧に批判反証していく努力に敬意を表したい。また、筆者のとばしい知識からいっても、ホックの指摘の方がはるかにうなずける。いずれにせよ、ヴェーダ文献研究は言語学や考古学にくらべると、コンセンサスがえられにくい。その原因は、

なによりもヴェーダがどこまで史実を反映したものでかわからないこと、そしてヴェーダの解釈がいくとおりにも可能であること、以上二点につきる。

そこで、こうした状況のなかで、ヴェーダには素人の筆者が指摘できることはつぎのことだ。ヒンドゥー・ナショナリストによるヴェーダの解釈は、これまでの解釈への反論が「西洋中心主義による人種主義にもとづく」といった批判だけで、具体的な事実への批判が用意されておらず、ほとんど考古学的な証拠を武器に、年代をさかのぼらせすぎている。一方、ホックの反論はヒンドゥー・ナショナリストの主張を言語学的手続きと、厳密なテキストの読みとによっておこなわれており、ヒンドゥー・ナショナリストが事実を問題とする気があるのなら、ホックの批判にちゃんとこたえるべきであらう。ヴェーダ文献の読み方一つで、インドの歴史がかえられてしまふとすれば、まさしく日本の歴史学界が戦前におかしたあやまちとなんらかわらない。皇国史観ならぬ、ヒンドゥー国史観におちいってしまふ危険性がある。うえて引用したように、フロリーが「アーリヤ人侵入説」が「文献による、あるいは考古学によるものではなく、政治的、宗教的なものである」とのべているが、かれらにこそこのことばをおくるべきである。

5 考古学的な証拠

ヒンドゥー・ナシヨナリズムとまったく関連がないかたちで、欧米の考古学者が「アーリヤ人侵入説」に明白に疑問を呈しだしたのは、管見がおよぶかぎりでは一九八〇年代である。ヒンドゥー・ナシヨナリストが反「アーリヤ人侵入説」を展開する以前のことである。そこで、ここではヒンドゥー・ナシヨナリストの主張を結果的にたすけるような考古学による研究成果をみていこう。

「アーリヤ人侵入説」への疑義をとнаえ、反「アーリヤ人侵入説」の中心的な役割を演じている考古学者はジム・シェーンフーである (Jim Shaffer 1984, 1992; Jim Shaffer & Lichtenstein 1989, 1995, 1999)。⁸⁸⁾ 一九八四年には、「インド・アーリヤの侵入：文化的神話と考古学の現実」と題する論文を執筆し、つぎのように指摘している。

“It is argued that current archaeological data do not support the existence of an Indo-Aryan or European invasion in South Asia at any time in the pre- or protohistoric periods. Instead, it is possible to document archaeologically a series of cultural changes reflecting indigenous cultural development from prehistoric to historic periods.” (Shaffer 1984:

88)

はつきりと、「ちいきんの考古学データは先史、原始時代のいかなる時代においても、インド・アーリヤ語族、あるいはインド・ヨーロッパ語族による南アジアへの侵入があったことを支持していない」と宣言している。また、言語学については、つぎのようなきびしい評価をくだしている。

“The Indo-Aryan invasion (s) as an academic concept in 18th- and 19th-century Europe reflected the cultural milieu of that period. Linguistic data were used to validate the concept that in turn was used to interpret archaeological and anthropological data. What was theory became unquestioned fact that was used to interpret and organize all subsequent data. It is time to end the ‘linguistic tyranny’ that has prescribed interpretative frameworks of pre- and proto-historic cultural development in South Asia.” (Shaffer 1984:

88)

「言語学の暴政」(linguistic tyranny) とはちがふかと思ふた言語学に対する批判である。⁸⁹⁾ あたかも、言語学は「一八世紀」「一九世紀」における西洋中心主義者たちの道具にすぎないといわんばかりである。

ナチスが「アーリア人種」神話でユダヤ人を大量に虐殺したために、まるで言語学がその下手人の片棒かつぎのようにみえるのか、かなりはげしい攻撃をくわえている。ヒンドゥー・ナショナリストたちが引用して (Rajaram 1995: 6-7, Rajaram & Frawley 1995: 57-58)、かれらの主張がいかに正当で、考古学者の支持をえたものを指摘する格好の根拠を提供している一節である。しかし、なんともいうように、インドの古典語サンスクリット語とヨーロッパの古典語ラテン語やギリシャ語が共通の印欧祖語からわかれた事実は、西洋人のためにあるものでもなく、インド人が研究しようが、日本人が研究しようがかわることのない「科学的真理」なのである。それを否定してしまつては「考古学の暴政」となってしまう。言語学を否定するのではなく、考古学的事実との整合性をはかるしかない。うえに引用したなかに、シェーファーが問題とする「言語学の暴政」によつて、解釈がゆがめられているとする「考古学や人類学のデータ」とは具体的にはなにをさすのか。それは、「アーリア人侵入」による不連続性がみられないこと、インダス文明を中心とする歴史は「内的な発展」の歴史とみなしうること、の二点である。その主張は最新の論文でもかわらない²²⁾。この不連続性よりも連続性がきわだっているという主張はシェーファーだけのものではない。たとえば、アメリカ隊のハラッパー考古学調査プロジェクトの成果として、「インダス溪谷の古代世界」展が一九九八年二月から五月に

かけて、ニューヨークで開催されたが、そのカタログとして出版された本のなかにも、右のシェーファーの主張と呼応するような指摘がある。

“Current theories on the role of Indo-Aryan-speaking peoples are beyond the scope of this book, but there is no archaeological or biological evidence for invasions or mass migrations into the Indus Valley between the end of the Harappan Phase, about 1900 B.C. and the beginning of the Early Historic period around 600 B.C.” (Kenoyer 1998: 174)

ここに指摘がある「生物学的証拠」(biological evidence)とは、シェーファーのいう「人類学のデータ」と同様、日本で形質人類学とか、自然人類学とよばれる学問成果による証拠である。つまり遺跡から発掘された人骨を研究する学問の成果をさす。南アジアの人骨研究者であるケネディは、人骨や形質人類学ではけつして「アーリア人」を特定できないことを強調したあと (Kennedy 1995: 32)、「つぎのように指摘している。

“Our multivariate approach does not define the biological identity of an ancient Aryan population, but it does indicate

that the Indus Valley and Gandhara peoples shared a number of craniometric, odontometric and discrete traits that point to a high degree of biological affinity. Evidence of demographic discontinuities is present in our study, but the first occurs between 6000 and 4500 B.C. (a separation between the Neolithic and Chalcolithic populations of Mehrgarh) and the second is after 800 B.C., the discontinuity being between the peoples of Harappa, Chalcolithic Mehrgarh and post-Harappa Timargarha on the one hand and the late Bronze Age and early Iron Age inhabitants of Sarai Khola on the other. In short, there is no evidence of demographic disruptions in the north-western sector of the subcontinent during and immediately after the decline of the Harappan culture. If Vedic Aryan were a biological entity represented by the skeletons from Timargarha, then their biological features of cranial and dental anatomy were not distinct to a marked degree from what we encountered in the ancient Harappans.” (Kennedy 1995: 49-54)

引用がなくなつたので、ケネディの指摘をまとめる。前半は二点である。まず、こゝした考古学的、形質・自然人類学

的データからは、紀元前一五〇〇年に侵入してきたとされる「アーリヤ人」によって、もたらされるはずの不連続性がみられないこととして、形質・自然人類学の成果からは紀元前四五〇〇年か、または紀元前八〇〇年に、不連続性がみられること、の二点だ。これらのデータと言語的事実との整合性をどのようにつけなければならないのか。そこがおおきな問題となっている。また、さいごの文がしめすように、身体特徴からいえば「ヴェーダ時代のアーリヤ人」とインダス文明の担い手である「古代ハラッパー人」とは近い関係にあるということに注意しなければならないのは、このことをもって、「アーリヤ人の侵入はなかった」という証明にはけつしてならない、ということである。言語学的にいえば、「古代ハラッパー人」が少数の騎馬民族がもたらしたインド・アーリヤ語を修得した結果であるとかんがえれば、なんの矛盾もない。

筆者は考古学者でも、自然人類学者でもないで、それぞれのデータについてなにも判断できない。そこで結論からいえば、筆者には、つぎのような見解がいちばん妥当ではないかとおもわれる。

“As a result of the investigation, some support was found in the archaeological record for small-scale migration from Central to South Asia in the late 3rd/early 2nd millennia B.C., but any support for Burrow’s 2-wave model (Burrow

1973) was firmly ruled out. The idea of invasions by a barbaric race enjoying technological and military superiority was I hope fatally undermined, and the chronology of movement into South Asia has been extended by several centuries, beyond what has generally been assumed from a misreading of the Rgveda as an account of foreign invasions. Linguists were, moreover, urged to construct more realistic models of social change to account for linguistic change, which could be further tested against the archaeological record.” (Erdosy 1995: 23)

日本語でまとめてみると、まず大規模な「アーリヤ人」の移住のかわりに、なんどかにわけ、数世紀にわたる小規模な移住を想定すること、戦力的にまさる野蛮人による「侵入」(invasion)はまったくなかったものとする事、⁽²³⁾「アーリヤ人」の侵入はリグ・ヴェーダの誤読による年代よりも数世紀遅らせること、そして言語学者はもっと現実的な社会変化のモデルをかんがえるべきであること、以上四点がのべられているが、筆者もこの結論には同意する。

ところで、今年(二〇〇〇年)三月六日の新聞に、「ドローヴィーラー遺跡」が大々的に報道されたが、インダス文明にかんする発掘調査には近年めざましいものがある。⁽²⁴⁾ インダス文明と「アーリヤ

人」の関係についてはわからないことだらけだが、「アーリヤ人侵入」以前についてはかなりいろいろとわかってきた。インダス文明をめぐっては、発掘当初からいわれてきたことだが、かなり大規模な交易がメソポタミアや湾岸地域とこなわれていたことが、具体的なルートが交易品とともにあきらかになってきたこと⁽²⁵⁾、また中央アジアのバクトリア・マルギアナ考古複合体との関連があきらかになったこと⁽²⁶⁾、フランス隊が発掘しているメヘルガルの遺跡の年代は最古層では紀元前六五〇〇年の新石器時代までさかのぼることができ⁽²⁷⁾が (C. Jarrige, J-F Jarrige, R. Meadow and G. Quivron eds 1996)。

さいきんの研究では新石器時代からインダス都市文明が衰退し、初期の鉄器時代までを連続してとらえるケースがおおく、その紀元前七〇〇〇年、あるいは紀元前六五〇〇年から紀元前一五〇〇年頃までを、シェーファアは「インダス渓谷文化伝統」(Indus Valley Tradition) とよんだり (Shaffer 1992)、ポーシェルは「インダス時代」(Indus Age) とよんでいること (Possehl 1999)。⁽²⁸⁾ 植物考古学の成果によれば、紀元前三〇〇〇年以前にはアフリカ原産の雑穀がインダス地域にはみられないこと (Weber 1998) や紀元前二二〇〇年頃に農法の変化がみられること (Weber 1997) などなどがあきらかになってきた。こんごの発掘によって、さらにインダス文明の歴史があらかになれば、「アーリヤ人」がどのようにに移住してきたのか、考古学的に裏づけられる日もくるかもしれない。

この考古学の問題では、「アーリヤ人」の大規模な移住はなかったとみなす見解がおおいことはすでにのべてきたが、こうした考古学のデータと比較方法によって再構築された祖語とをむすびつける努力をはらっている学者がいる。フィンランドのインダス文字研究で有名なバルボラである (Parpola 1988, 1993, 1994, 1995, 1997, 1998, 1999, Forthcoming)。インド・イラン祖語はイラン祖語とインド・アーリヤ祖語に分歧するが、バルボラはさらにインド・アーリヤ祖語をダーサ祖語 (リグ・ヴェーダに登場するダーサに由来) と東アーリヤ祖語にわけている。そして、ダーサ祖語の話し手はバクトリア・マルギアナ考古複合体 (紀元前一九〇〇—一七〇〇年) と関連づけ、東アーリヤ祖語はアンドロノヴォ文化 (シベリアのエニセイ川上流にある村の名からとられ、アラル海から北カザフスタンを中心に広がる文化で、紀元前一九〇〇—一五〇〇年にさかえた) と関連させている。また、リグ・ヴェーダ祖語の話し手については早期ガンダーラ墓制文化 (紀元前一六〇〇—一四〇〇年) と関連づけている。このバルボラの説が考古学的にどこまで妥当なのか。考古学者の判断をまつしかない。この年代でいけば、あくまでも「アーリヤ人」は紀元前一五〇〇年頃、移住してきたことになる²⁷⁾。

さらに、考古学者のなかに、「アーリヤ人」の段階的移住を想定する学者がいる。ケンブリッジ大学のレイモンド・オールチンである (Raymond Allchin 1995)。かれは、つぎの四段階をかんがえる。

第一段階 (紀元前三二〇〇—二二〇〇年)

インド・アーリヤ祖語の話し手がインダス溪谷の西にやってきた「はじめての出会い」 (First encounters) 段階。

第二段階 (紀元前二〇〇〇—一七〇〇年)

それまでインダス溪谷で話されていた言語がインド・アーリヤ祖語に置換する「相互作用と征服」 (Interaction and conquest) 段階。

第三段階 (紀元前一七〇〇—一二〇〇年)

言語の置換と文化変容がおしすすめられる「文化変容」 (Acculturation) 段階。

第四段階 (紀元前二二〇〇—八〇〇年)

文化的に複合的な「アーリヤ文化」の出現 (emergence of Aryan cultural pluralism) 段階。

言語の移行はかなり長期にわたって時間が費やされたとみるが、こうした移行例がみちかな実例としてあればいいが、どうだろうか。すでにみたように、ニコルズが指摘するように、ユーラシア大陸ではドラスティックに言語がいれかわってしまいうケースがおおいのはなからうか。また、言語はちよつとずつ浸透しながら、ひろがっていくのではない。たいていの場合、まずバイリンガルな状況をへて、A言語からB言語へ移行する。オールチンはこうしたバイリンガル段階は「百年にはいかず、数十年」 ("The process of bilingual-

ism leading to language exchange must have continued for decades, if not centuries.” Allchin 1995: 52) とみているが、バイリンガル段階についていえば、もったない時間を想定してもよいのではないか。第二段階についていえば、商売や交易を通じた「インド・アーリヤ祖語」による通商語（リンガ・フランカ）と現地語のバイリンガルな状態を想定する方が説得力があるのではなからうか。それに、なによりも標的となりやすい「征服」（conquest）という用語は使用すべきではない。いろいろと問題があるが、「インド・アーリヤ語化」が時間をかけておこなわれたという視点については評価できる。このオールチンの説をみても、やはり「紀元前一五〇〇年頃、アーリヤ人の侵入」という歴史記述はあらためるべきである。

考古学と印欧語族やインド・アーリヤ語族に関連して、もうひとつだいたいの馬の問題である。印欧祖語**ekwos* “horse”はヴェーダ語 *asva* アヴェスタ語 *aspa* ラテン語 *equus* トカラ語 *yakwe* などに保持され、印欧祖語の話し手が馬をもち、その馬がインド・イラン祖語でも、インド・アーリヤ祖語でも、伝承されてきたとかがえられている。アンソニーらの研究によると (Anthony 1986, 1994, 1995; Anthony & Brown 1991; Anthony & Vinogradov 1995) 馬の飼育化にじっさい“the horses were first domesticated and the riding began in the western Eurasian steppes about 4000 CE.” (Anthony 1994: 193) と、紀元前四〇〇〇年のユーラシア大陸のス

テップ地帯でおこなわれたという。この馬はインド・アーリヤ祖語の話し手が南アジアにもちこんだといえまではかんがえられてきた。しかし、紀元前三〇〇—一七〇〇年頃の年代と推定できるスールコータダー遺跡（インド・グジャラート州）で、馬の骨がみつかり、ヒンドゥー・ナショナリストたちは馬についても、「アーリヤ人侵入説」の根拠にならないと主張している。ところが、この馬の骨をめぐる、論争がおこっている (Sharma 1974, 1993; Meadow 1987, 1996; Bökönyi 1997; Meadow and Patel 1997)。つまり、この馬の骨が本物だ (Bökönyi 1997) とする説と本物の馬ではないとする説 (Meadow and Patel 1997, Meadow 1996) がまっとうに対立している。論争の当事者であるメドウが“the prolonged and sometimes highly technical debate.” (Meadow 1996: 406) と指摘するように、素人には判断がつかない。しかしながら、メドウの指摘は無視し、ヒンドゥー・ナショナリストはこの馬の骨をもって、「アーリヤ人侵入説」の無効性を主張している。

さらに、二〇〇〇年にはいって、馬をめぐる論争はあらたな局面をむかえている。それは Jha & Rajaram (2000) がインダス紋章のひとつを馬の紋章であると主張していることに端を発する。それにちなみ (Jha & Rajaram 2000: 177) Mackay (1937-38) とみてもう一つ Mackay 453 の番号がつけられている紋章が馬の紋章 (horse seal) であると認定し、ハラッパーに馬がないという定説は根拠がな

いと指摘しているのである。ところが、その馬の紋章がおおきな問題となっている。じつは、この Mackay 453 は Parpola (1991) *Corpus of Indus Seals and Inscriptions* にも登場し、M-772A と番号づけられている。Witzel & Farmer (2000: 9) によれば、そのふたつの写真をくらべた結果、この「馬」と主張されている紋章は六〇年以上前の Mackay 453 でははっきりとしないが、Parpola (1991) の M-772A をみれば、インダス紋章によくある一角牛の紋章であることがはっきりとわかり、その一部がかけているために、わかりにくくなっているのだという。たしかに、M-772A をみるかぎりには、だれの目にもあきらかに、一角牛の紋章にみえるようにおもわれるが、どうであろうか。また、インド学のインターネット上で、ロシアのインド学研究者である Yaroslav Vassilkov は Jha & Rajaram (2000: 17) の紋章図が「コンピュータによる誇張」(computer enhancement) だと断定している。Witzel & Farmer (2000: 9) もかれの指摘を支持しているが、これはあきらかにラージャラムたちの勇み足である。うえのスールコターダ遺跡での馬の骨であれば十分学問的に議論の価値がある。しかしながら、インダスの紋章を捏造してしまつては一卷のわりである。なんどもくりかえすように、ヒンドゥー・ナシヨナリストの主張には実証的な部分がまったくないわけではない。アメリカの考古学者やイギリスの著名な人類学者などが「アーリヤ人侵入説」に反対するだけの

根拠があるにもかかわらず、こうした証拠を提示してしまつては言語道断だ。人間と類人猿のミッシングリングとさわがれ、しかもあとでウソであることがわかつたビルトダウン人にちなんで「ビルトダウンの馬」(Pitdown horse) とヴィッツェルたちに揶揄されているが、そういわれてもしかたがあるまい。

右でみた Jha & Rajaram (2000) で代表されるように、ヒンドゥー・ナシヨナリストたちが目下躍起になっているのが、インダス文字のインド・アーリヤ語、とりわけヴェーダ時代のサンスクリット語による解読である (S.R.Rao 1992, N. Jha 1996, Jha & Rajaram 2000)。しかし、これがインド・アーリヤ語で解読できるのであれば、すでに解読されていたはずだし、とてもコンセンサスがえられる見通しはない。ドラヴィダ語による解読についていえば、パルポラの努力にもかかわらず、状況証拠的な解読でしかない (Parpola 1994)。パルポラの大著が *Deciphering the Indus Script* と題し、「解読されつつある」と進行形をとっていることは、いみじくも完全なる解読にはいたっていないことを、パルポラ自身がみとめていることをしめしている。インダス文明とメソポタミア文明などの外部世界との交流から、インダス文字が楔形文字などで表記された資料が発見されるのではないかと期待されているが、残念ながら、まだそうした発見はない。一九九九年五月四日には、メソポタミア文明よりもさらに古い時代の紀元前三五〇〇年のインダス文字が発見

されたとBBCがセンセーショナルに報道したし、ドーラーヴィーラー遺跡でみつかったインダス文字で書かれた「世界最古の看板」らしきものが話題になったが、かんじんのインダス文字解読にはいたっていない。インダス文字を恣意的な解釈で、どのようにでも読むことは可能だが、それと万人が解読できたと判断するのは次元がまったくちがう。インダス文字の解読はこんごも時間がかかりそうである。

考古学をめぐる諸問題におおく頁数をついやしてきた。さいごにもういちど、ヒンドゥー・ナショナリストにもどろう。考古学的には、かれらに有利にはたらいっていることはまちがいない。しかしながら、考古学者のいうとおり、南アジアの歴史的発展が紀元前六〇〇年から連続的な発達をとげたとしても、ヒンドゥー・ナショナリストがヴェーダ文化の上限をどんどんふるくしてしまふことはむずかしい。まさか、新石器時代にリグ・ヴェーダは制作されたでは、荒唐無稽な、あらたなる神話作りとなるだけのことである。かれらのヒンドゥー国家思想にとって、「アーリヤ人侵入説」が都合がわるいのはわからなくもないが、事実として、否定するには言語の同系がおもくのしかかっている。言語学は科学ではないとして、言語学を切り捨てた形で、ヒンドゥー・ナショナリストの運動が展開されるとしたら、いくら考古学的事実に依拠していても、さいごには墓穴をはるような行為にでかねない。筆者には、「ビルトダウンの

馬」がそういう行為のあらわれのようにみえてならない。ヒンドゥー・ナショナリストのこんごの出方が注目される。

6 おわりに

小論は「アーリヤ人侵入説」の検証を目的として、これまでの学説について、言語学、インド文献学、考古学の三分野にわたって紹介してきた。その結果、私見によれば、どうやら「アーリヤ人の侵入説」はいろんな点で改訂を必要とするようだ。その第一が、「アーリヤ人」という名称である。もつとも無難な表現としては「インド・アーリヤ祖語、あるいはインド・アーリヤ語族に属する言語を話す人々」であろう。つぎに、「侵入」も、「小規模な集団による、波状的な移住」とすべきである。さいごに、年代については「紀元前一五〇〇年」というじゅうらいの年代特定は不可能で、紀元前二千年紀頃と、かなり幅をもたせてはどうだろうか。

ヒンドゥー・ナショナリストたちの主張は、アヨーディア事件でもあきらかになったように、まったく根拠のない場合がおおい。しかし、今回のケースについていえば、ヒンドゥー・ナショナリストの主張をくんで、いくらか修正が必要なのではなからうか。しかしながら、これは事実の検討による修正であって、ヒンドゥー・ナショナリストの主張をそのままうけいれるわけではない。ヒンドゥー・ナショナリストたちがヒンドゥー国家建設をいそぐあまり、ヒ

ンドゥー国史観を捏造するようなことがあれば、インド言語の研究にたずさわる者として、だんじて許してはなるまい。ヒンドゥー・ナシヨナリストたちがこんごのような運動を展開するのか。氣をつけて、みまもっていききたい。

注

- (1) 「ヒンドゥー・ナシヨナリズム」や「ヒンドゥー・ナシヨナリスト」という用語は「ヒンドゥー国家建設をめざすイデオロギー」と「そのイデオロギーにもとづいて運動を展開する人々」をさすとかんがえていただきたい。類似の用語に「ヒンドゥー・コミュニティズム」(小谷一九九三)や「ヒンドゥー主義」(堀本一九九六、ただし、題名だけで本文にはない)、そして「ヒンドゥー原理主義」(木村一九九六、内藤一九九八)などがある。また、広瀬(一九九九・三)は「穏健なナシヨナリズム」と過激な「ヒンドゥー至上主義」を区別している。これらの用語の整理と厳密な分析は小論の射程範囲にはない。ここでは近藤光博(一九九八、一九九九a・b)にしたがって、「ヒンドゥー・ナシヨナリズム」や「ヒンドゥー・ナシヨナリスト」という用語を使用する。
- (2) なお、ヴィヴェーカーナンダやオーロピンドの「アーリアン学説」(と津田はよぶ)への反対説については、津田(一九九〇)がくわしく紹介している。津田(一九九〇)は西洋人の学説とインド人の学説の対比にもとづいて、「西欧史学偏重へのインドからの反

証」(本の帯広告)という立場から「アーリアン学説」の再検討をおこなっている。津田の主張には、ヒンドゥー・ナシヨナリストにくみするようなところがみられ、アヨーディヤ事件以後のヒンドゥー・ナシヨナリストよりも先をいくという意味で先駆的である。じゅうらいの主張が西洋中心主義の人種主義にむすびつくという指摘にはおおいに賛同するが、ヒンドゥー・ナシヨナリストの危うさには「確かに、インド・ナシヨナリズムによる勇み足とも思われる主張もあったが」(津田一九九〇・四)とのべる程度で、その後の過激なヒンドゥー・ナシヨナリストの行動を予見していなかったようだ。また、津田は言語学や考古学の問題にまったくふれていない。その点もひじょうに残念である。

このように、津田(一九九〇)にはいくつかの問題点があるものの、「アーリア人侵入説」形成史の一側面を日本語で紹介していることや、「アーリアン学説は、学説として成立しえない」(津田一九九〇・二三三)という結論など、小論とかさなるところもすくなくない。しかしながら、小論はヒンドゥー・ナシヨナリストの運動、とりわけアヨーディヤ事件以後の反「アーリア人侵入説」に焦点をあてたもので、津田(一九九〇)の議論はとくにとりあげない。小論に関心のある方はぜひご一読ください。

- (3) アヨーディヤ事件については、小谷(一九九三)、広瀬(一九九四)、木村(一九九六)などを参照。なお、アヨーディヤ事件の歴史的考古学的な根拠とそれをめぐる論争については、つぎの歴史学者や考古学者の論考を参照のこと。Gopal, Thapar, Panikkar & Bhattacharya (1992), Mandal (1993), N. Rao (1994), Nandy

(1995), Bernbeck & Pollock (1996), Shaw (2000) など。

(4) デヴィッド・フロリーの訪印時の新聞記事として『Times of India (二〇〇〇年三月三〇日)』Indian Express (二〇〇〇年三月一二日) など、インド主要全国紙に掲載されている。かれの略歴等は、このインターネットのサイトでみることが出来る。<http://www.vedanet.com/Biography.htm> また、Frawley (1994) *The Myth of the Aryan Invasion of India* は、このサイトで読むことが出来る。<http://www.hindubooks.org/davidfrawley/myth-aryan-invasion/> の Frawley (1994) については、小論ではインターネット上で公開された論文から引用したので、頁数が表示されていない。その点をあらかじめおことわりしておく。

なお、フロリーはじめ、反「アーリア人侵入説」を標榜する著作物は、おおくの場合、「インドの声」社 (Voice of India) から出版されている。このヒンドゥー・ナショナリストの出版物をあつかう「インドの声」社 (Voice of India) については、近藤光博 (一九九九年) を参照。

(5) 比較言語学史については風間 (一九七八) を参照。また、一九世紀から二〇世紀にかけて「アーリア人」概念と「民族」、「人種」概念がどのように成立し、展開していったかは Leopold (1970, 1974), Thapar (1996), Chakrabarti (1997), Trautmann (1997, 1999), Bryant (1999a), Arvidsson (1999) などを参照。小論では、インドにおける議論をおもにあつかうが、かつて「アーリア人種」説がナチスのユダヤ人大量虐殺をうみだすことになったことも注意する必要がある。このヨーロッパにおける「アーリア神話」の形成

についてはボリアコフ (一九八五) がくわしい。ただし、ボリアコフが日本語版序文のなかでいうように、インドにおける「アーリア神話」については「インドの政治煽動家たちがこれを用いているかどうか私は知らない」(ボリアコフ一九八五: iv) とあり、まったくふれられていない。

なお、英語表記の Arya は日本語で「アーリア」とも、「アーリア」ともいうが、小論ではインドをコンテキストとする場合はすべて「アーリア」(人、語など) とし、ナチスの問題や引用については「アーリア」(人種、神話など) とした。また、言語学では「インド・アーリア」(語族、諸語など) とよびならわし、「インド・アーリア」(語族、諸語など) とはいわないのが一般的である。したがって、これまでの筆者の論文 (長田一九九七など) では、言語学の慣用にしがって「インド・アーリア語族」と書きならわしてきたが、今回だけは無用な使い分けで混乱をふせぐために、「インド・アーリア語族」で統一した。日本において、歴史学などではもっぱら「アーリア」(人など) とつかい、言語学などでは「アーリア」(語族など) と使用するが、まったく同一のものであって、あくまでも慣用の問題である。

(6) ドラヴィダ語の「発見」については児玉 (一九九三) を参照。なお、こゝで言及された一九世紀の著作である Campbell (1816) や Caldwell (1856) は、どちらもニューデリーの出版社 (Asian Educational Service) からリプリントされており、いまでもかんたんに手に入る。

(7) たとえば、一九九〇年以降に出版されたインドについての入門

書にも、「先住民たちは」ダーサあるいはダスユと呼ばれ、また、黒い肌と低い鼻をもち」(辛島一九九二:二九)とか、「皮膚が黒く、鼻が低い先住民」(辛島監修一九九二:一三)とされるしている。

(8) たとえば、二一世紀をむかえようという時点でも、つぎのような記述に遭遇することがある。「古代インドに於ける民族的大事件、それは前一五〇〇年頃アーリヤ人が、氏族・部族の単位で馬と戦車をもって波状的にカイバル峠を越えて、インドス川中流域の「Punjab Plain」に侵攻して、先住の「Dravidians」「Mundas」民族の築いたインドス青銅器都市文明を破壊征服していった事件である」(町田二〇〇〇:一七二)。また専門家でも、インド古代史を専門とする山崎(一九九七:四三―四四)は年代的な整合性に疑問があるとしながらも、「アーリヤ人の殺戮」説を紹介しているし、考古学を専門とする近藤英夫(一九九四:一三六)や徐朝龍(一九九六:一〇七)も、否定的ながらも、一つの可能性として紹介している。なお、ウィーラーにリグ・ヴェーダをふきこみ、アーリヤ人征服説をうちたてるのに関与したインド人(V.S. Agrawala)がいたということを、インド考古学局の総局長をつとめたラールたちは、ウィーラー説誕生の裏話として喧伝しているという(Posselt 1997: 441)。

(9) Rajaram (1995) や Talageri (1993) には、ノストラティックについて、いっさい言及がなく、かれらには言語学の最近の動向がわかっていないようだが、Feuerstein, Kak & Frawley (1995: 141-142) はノストラティックに言及している。なお、ノストラティック大語族については、長田(一九九八)で紹介したことがあるので、

そちらを参照。

(10) ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジの Dominik Wujastyk によって開設されたインド学のウェブ・サイトは以下のとおり。
<http://www.ucl.ac.uk/~ucgadjw/indology.html> 「アーリヤ人侵入説」をめぐる論争は一九九九年九月ごろが頂点で、この論文の執筆時(二〇〇〇年六月)にはかんぜんに下火になっている。なお、去年の九月のインターネット上の論争も Archives にアクセスすることで、よむことができる。

また、エルスト個人のサイト (<http://members.xoom.com/KoenraadEls/>) では、エルストの最新論文がダウンロードしないで、よめるようになっていいる。今回の論争のおおきな特徴はインターネット上でのやりとりが、かなりのウェートをしめていることである。

(11) こうした観点をさいしよにしめした言語学者にトルベツコイがいる (Trubetzkoy 1939)。単一の民族に同意しないだけではなく、印欧祖語自体も、複数の言語がいわば「クレオール」として形成された可能性も指摘している。その後の言語学が「クレオール」や「ピジン」研究にちからをいれるようになったが、その当時としては画期的な見解であった。

また、「民族」「人種」の定義について、ここまでなにものべてこなかったが、それ自体がおおきなテーマである。近年では、近代において、こうした概念がいかに創出されていったかという研究が大流行である。しかし、ここでは「民族」はそれぞれの所属意識によって規定されるものとし、「人種」はモンゴロイドやコーカソイドと

いった身体特徴によって規定されるものとしておく。後者の「人種」概念の有効性が問題になることもあるが、ここではそうした問題は問わない。「民族」や「人種」の概念については、日本民族学会でアンケートがとられ、その結果が『民族学研究』六三巻四号（一九九九年）に掲載されているが、もちろん統一された「民族」の定義や見解などはない。くわしくは、青柳（一九九九）、ヘンリ（一九九九）、竹沢（一九九九）、川田（一九九九）を参照。

(12) さいきん、新疆ウイグル自治区のタリム盆地で、紀元前一二〇〇—七〇〇年頃のミイラが発見されたが、そのミイラはコーカソイドだといわれている (Maiti 1995: 174)。したがって、護の指摘する「インドヨーロッパ系人種」というのは表現としておかしいのである。『インドヨーロッパ系人種』II「コーカソイド」とみれば、事実がおかしいわけではない。もちろん、「コーカソイド」という人種概念の有効性についてはここでは問題としないし、筆者の判断できるものではない。

(13) 先日、安田喜憲教授が印欧語族を一つの民族のように解釈して、エッセイを書いておられたが（安田二〇〇〇）、こうした混同は枚挙にいとまがない。系統樹説が生物学のモデルから出発したのだから、「語族」を「語種」とか、「語属」とかにあらためると、こうした混同はおこりにくい。定着した学術用語を変更することとはなかなかむずかしいが、混同をふせぐために、用語を変更してみてもうだろうか。

(14) パルボラ教授からの私信によると、スキタイ民族というのはスキタイ王国の成立時代との時代的な問題があるものの、イラン系言

語の話し手という意味では支持するという。また、パルボラ教授もさいきんでは風聞説と同様、ダーサがインド・アーリヤ語族に属する言語をはなしたのではなく、イラン語族に属する言語をはなしたとかがえていっているという (Parpola forthcoming)。なお、ダーサがおなじインド・イラン語族に属する言語をはなすことは、インド古代史家ジャールもうけいれているが (Jha 1998: 45)、ジャールはヒンドゥー・ナショナリストから「マルクス主義歴史家」として攻撃をうけている。

(15) 言語的先史研究について、くわしくはクラエ（一九七〇）、亀井（一九七三）、高津（一九九二）、風間（一九九三）などを参照。なお、ソシュール『一般言語学講義』の小林英夫訳によれば、フランス語の *paléontologie linguistique*（英語の *linguistic palaeontology* に対応）を「言語学的古生物学」と訳しているが、この訳語は定着しなかったようだ。

(16) 言語年代学はアメリカの言語学者スワデシュが提唱した方法論で、身体部位や数詞など、借用されにくい基礎語彙 200 語を比較し、その対応語が一〇〇〇年で約八一%維持されるという原則を適応することで、分岐年代が推測できるといえるものである。一時は、言語の分岐年代がはかれるともてはやされ、考古学における C¹⁴ と同様の成果が期待されたが、「言語年代学は十分には実証されていない仮説といくつかの実情に合わない前提条件の下に成立する理論なので C¹⁴ による年代測定と同一視するわけにはいかない」（浅井一九八〇・二九三）として、さいきんでは言語年代学の有効性は疑問視されている。言語年代学の紹介や日本語の系統問題への適応は服部

(一九六〇)を参照。

(17) 印欧祖語の年代問題については、Mallory (1996) がこれまでの論をまとめている。それによると、書かれた資料からしか年代をわりだすことは不可能だとして、印欧祖語の年代を紀元前二五〇〇年とみる言語学者 (Zimmer 1988: 374, Olmsted 1993) たちを「厳密な解釈者」(strict constructionist) とし、Mallory (1996)「風間 (一九九三) による印欧祖語年代はその解釈をとっている」。

(18) ギンブタスの著作については、彼女の死後、Gimbutas (1997) として、まとめられている。また、日本語によるギンブタスの学説紹介については角田 (一九七八)、風間 (一九九三) などを参照のこと。一方、レンフルーの学説はレンフルー (一九九三) として、日本語で読める。また、レンフルーへの言語学者による批判は風間 (一九九三) を参照。

(19) サラスヴァティー川の水がかれた年代について、紀元前一五〇〇年 (Erdosy 1989) とする説もある。

(20) 筆者は、バルボラや風間のように、「ダーサ」をインド・アーリア諸語、あるいはインド・イラン諸語をはなす人々とみなす説に賛成する一方で、ホックがしめす「ダーサ」を「民族」や「人種」とみなすことに反対する説に賛成すれば、自己矛盾をおこしているようにおもわれるかもしれない。しかし、「ダーサ」とよばれる人々がはなす言語の問題と、「ダーサ」がどんな民族であるかとか、どんな身体特徴をもった人種であるかという問題とは混同してはならない。つまり、「黒い肌の」「牡牛の唇をもつ」「鼻のない(低い)」という解釈については、ホックの指摘にしたがって、こうし

た解釈が根拠がないものとかんがえる。一方、「ダーサ」のはなす言語については、ホックや風間にしたがって、インド・イラン語派に属する言語をはなしたとみる。ここには矛盾はない。言語と「民族」「人種」を一セットにかんがえる解釈があると、矛盾したようにみえるが、筆者がなんども指摘するように、これらを混同してはならない。

(21) この「言語学の暴政」(linguistic tyranny) という挑発的な言い方は、ボリアコフ (一九八五: 三四〇—三四八) の第二部第五章「アーリアの時代」の小見出しに登場する「言語学者の専制」を引用したものであろう。

(22) さいきんのリヒテンシュタインとの共著論文のなかでも、“The modern archaeological record for South Asia indicates a cultural history of continuity rather than the earlier eighteenth through twentieth century interpretations of discontinuity and South Asia dependence upon Western Influences.” (Shaffer & Lichtenstein 1999: 235) とのべている。もともと、さいきんでは言語学への批判は影をひそめ、ウィーラーのパラダイムに対する批判へとシフトしている (Shaffer & Lichtenstein 1999: 244)。

(23) 残念ながら、日本では、かんたんな紹介や地域をかぎった論議しかないが、インダス文明の全体像がみえるような本の出版がのぞまれる。これまでのインダス文明にかんする本と一九九〇年代以降の紹介記事については参考文献であげておいた。たとえば、単行本では曾野 (一九七〇)、小西 (一九七七)、森本編 (一九七九) (森本と桑山の対談が掲載)、辛島・桑山・小西・山崎 (一九八〇) な

ど。また、インド考古研究会が『インド考古研究』を刊行しているが、その『インド考古研究』にはインダス文明にかんする研究成果が紹介されている。インダス文明に関する論文収集にさいし、日文研にいた徐朝龍さんから、論文の抜き刷りをいただいたことをここにしるし、感謝の意をあらわしたい。

なお、論文の草稿をほぼ書き終えた時点で、『四大文明 インダス文明』（NHK出版）が刊行されたが、その本によって、さいきんの研究成果を知ることができる。

- (24) 紀元前三千年紀には Meluhha (インダス地域) Dilman, Magan (いずれも湾岸地域) の三カ所が交易にとって重要な場所であったことが楔形文字で書かれた文献からわかっている。インダス地域とメソポタミア、湾岸地域との交易については以下の文献を参照。Chakrabarti (1990), Frank-Vogt (1993), Edens (1993), Ratnagar (1994), Collon (1996), Posschl (1996b), Vogt (1996) など。
- (25) バクトリア・マルギアナ考古複合をはじめ、中央アジアとインダス文明の関係については以下の文献を参照。Francfort (1992), Sarianidi (1993, 1994), Parpola (1993), Lyonett (1994), Hiebert (1994, 1995, 1998), Stacul (1994), Shishina & Hiebert (1998) など。

- (26) インダス文明の盛期よりもふるい、バルーチスタン（バルーチスタン）の農耕文化については、日本のインダス文明研究の第一人者である小西（一九九九：二一〇）によると、「いずれにせよこれらのバルーチスタン諸文化が、『初期ハラッパー文化』として文明形成の母体となったとは考えられない」とみなし、インダス

文明と直接関連させていない。

- (27) なお、バルボラ教授に、さいきんの考古学的な「大規模移住」の否定について、Eメールによって見解をもとめたところ、考古学者は「大規模な移住」(mass immigration) を否定しているのであって、移住そのものを否定しているわけではないとのご返答をいただいた。筆者のぶしつけな質問にていねいにお答えくださったバルボラ教授に感謝の意を表したい。

- (28) これまで、どのような解説がなされてきたかについては Parpola (1994) の巻末にある“Bibliographical notes” (pp284-302) および Posschl (1996a) を参照。また、筆者が専門とするムンダ語による解説 (Newberry 1994) やインダス文明の担い手をムンダ祖語の話し手とする説 (Biswas 1995) やさらにアーリヤ祖語の話し手が移住してきたときに、バラ・ムンダ語がはなされていたという Witzel (1999b) などがあるが、程度の差はあれ、いずれも実証的というにはほど遠い。こうした研究が実証的ではないからといって、インダス文字がムンダ祖語、あるいはムンダ語族に属する言語によって解読できる可能性がまったくなくなったわけではないと、筆者はかんがえている。

参考文献

- Adams, Jonathan (In press) “Did Indo-European languages spread before farming?”, *Current Anthropology*. (see the following site: <http://saravai.simplenet.com/aryan/Indo2.html>)
- Agrawal, Dinesh (1995) *Demise of the Aryan Invasion Theory*. Hindu

Vivek Kendra, Mumbai.

Allchin, Bridget and Raymond Allchin (1982) *The Rise of Civilization in India and Pakistan*. Cambridge University Press, Cambridge.

Allchin, Bridget and Raymond Allchin (1993) *The Birth of Indian Civilization with a New Introduction*. Penguin Books India, New Delhi.

Allchin, Bridget and Raymond Allchin (1997) *Origins of a Civilization : The Prehistory and Early Archaeology of South Asia*. Viking, New Delhi.

Allchin, Bridget and Raymond Allchin (eds). (1997) *South Asian Archaeology 1995*. Oxford & IBH, New Delhi.

Allchin, Raymond (1995) *The Archaeology of Early Historic South Asia : The Emergence of Cities and States*. Cambridge University Press, Cambridge.

Allen, Nicholas J. (1999) "Hinduism as Indo-European: cultural comparativism and political sensitivities", Johannes Bronkhorst and Madhav M. Deshpande (eds). pp.19-32.

Anthony, D.W. (1986) "The 'Kurgan Culture', Indo-European origins and the domestication of the horse: a reconsideration", *Current Anthropology* 27(4) : 291-313.

Anthony, D. W. (1991) "The archaeology of Indo-European origins", *Journal of Indo-European Studies* 19(3-4) : 193-222.

Anthony, D. W. (1994) "The earliest horseback riders and Indo-

European origins: new evidence from the Steppes", Hänsel and Zimmer (eds). pp.185-197

Anthony, D. W. (1995) "Horse, wagon and chariot: Indo-European languages and archaeology", *Antiquity* 69(264) : 554-565.

Anthony, D.W. (1998) "The opening of the Eurasian steppe at 2000 BCE", Mair (ed).pp.94-113.

Anthony, D. W. & D. R. Brown (1991) "Origins of horseback riding", *Antiquity* 65 : 22-38

Anthony, D. W. & N. B. Vinogradov (1995) "Birth of the chariot", *Archaeology* 48(2) : 36-41.

青柳雄一郎 (一九九九) 「新しい人種・民族の概念を求めよう――アー・調査の結果から――」『民族学研究』六三(四) : 四〇六―四一六。

Arvíðsson, Stefan (1999) "Aryan mythology as science and ideology", *Journal of the American Academy of Religion* 67(2) : 327-354.

Aryan, K.C. and S. Aryan (1998) *The Aryans History of Vedic Period*. Rekha Prakashan, Delhi.

浅井亨 (一九八〇) 「数理的なみた言語の変化」池上二良編『講座言語の言語の変化』二六―二九六頁。大修館書店。

Aurobindo, Sri. (1956) *On the Veda*. Sri Aurobindo Ashram, Pondicherry.

Barbujani, G., R. Sokal and N. Oden (1995) "Indo-European origins: A computer-simulation test of five hypotheses", *American Journal*

of *Physical Anthropology* 96 : 109-132.

Bernbeck, R. & S. Pollock (1996) "Ayodhya, archaeology and identity", *Current Anthropology* 37(Supplement) : S. 138-S. 142.

Bisht, R.S. (1990) "Dholavira : a new horizon of the Indus civilization", *Puratana* 20 : 71-82.

Bisht, R.S. (1999) "Harappans and the Rgyeda : points of convergence", Pande (ed). pp.393-442.

Biswas, S.K. (1995) *Autochthon of India and the Aryan Invasions*. Genuine Publications, Delhi.

Blench, Roger and Matthew Spriggs (1997) *Archaeology and Language I : Theoretical and Methodological Orientations*. Routledge, London.

Blench, Roger and Matthew Spriggs (1998a) *Archaeology and Language II : Archaeological Data and Linguistic Hypothesis*. Routledge, London.

Blench, Roger and Matthew Spriggs (1998b) *Archaeology and Language III : Artefacts, Language and Texts*. Routledge, London.

Blench, Roger and Matthew Spriggs (1999) *Archaeology and Language IV : Language Change and Cultural Transformation*. Routledge, London.

Bökönyi, Sándor (1997) "Horse remains from the prehistoric site of Surkotada, Kutch, Late 3rd Millennium B.C.", *South Asian Studies* 13 : 297-307.

Bomhard, A. (1996) *Indo-European and the Nostratic Hypothesis*.

Signum, Charleston.

Bronkhorst, Johannes and Madhav M. Deshpande (eds)(1999) *Aryan and Non-Aryan in South Asia : Evidence, Interpretation and Ideology*. Department of Sanskrit and Indian Studies, Harvard University, Cambridge.

Bryant, Edwin F. (1999a) "Linguistic substrata and the indigenous Aryan debate", Johannes Bronkhorst and Madhav M. Deshpande (eds). pp.59-83.

Bryant, Edwin F. (1999b) "The Indo-Aryan invasion debate : the logic of the response", *Proceedings of Tenth Annual UCLA Indo-European Conference* 205-229.

Bryant, Edwin F. (2000) *In Quest of the Origins of Vedic Culture : the Indo-Aryan Migration Debate*. Oxford University Press, New York.

Burrow, Thomas (1973) "The Proto-Indoaryans", *Journal of the Royal Asiatic Society* (NS) 2 : 123-140.

Caldwell, R. (1856) *A Comparative Grammar of the Dravidian or the South India Family of Languages*. Reprinted in 1961. University of Madras, Madras.

Campanile, Enrico (1998) "The Indo-Europeans : Origin and Culture", Anna Giacalone Ramat & Paolo Ramat (ed). *The Indo-European Languages*. Routledge, London and New York.

Campbell, A. D. (1816) *A Grammar of the Telooogo Language*. Madras.

- Carter, Martha L. (1996) "Notes on Bronze Age Bactria and India", *Mitra* (ed). pp.157-169.
- Chakrabarti, Dilip K. (1968) "The Aryan hypothesis in Indian archaeology", *Indian Studies Past and Present* 4 : 333-348.
- Chakrabarti, Dilip K. (1986) "Further notes on the Aryan hypothesis in Indian archaeology", K.C.Verma(ed). *Rambhara : Studies in Indology*. pp.74-77. Society for Indic Studies, Ghaziabad.
- Chakrabarti, Dilip K. (1990) *The External Trade of the Indus Civilization*. Munshiram Manoharlal, Delhi.
- Chakrabarti, Dilip K. (1997) *Colonial Indology*. Munshiram Manoharlal, New Delhi.
- Chakrabarti, Dilip K. (2000) "Colonial indology and identity", *Antiquity* 74 : 667-671.
- Chengappa, Raj (1998) "The Indus riddle", *Indian Today* January 26, 1998.
- Choudhury, Paramesh (1993) *The Aryans : A Modern Myth*. Eastern Publishers, Delhi.
- Choudhury, Paramesh (1995) *The Aryan Hoax that Dupes the Indians*. Calcutta.
- Collon, Dominique (1996) "Mesopotamia and the Indus : the evidence of the seals", Julian Reade (ed). pp.209-225.
- Cunningham, Robin & Nick Lewer (2000) "Archaeology and identity in South Asia-interpretations and consequences", *Antiquity* 74 : 664-667.
- Danino, Michel and S. Nahar (1996) *The Invasion that Never Was. The Mother's Institute of Research*, Delhi.
- Deo, S. B., and Suryanath Kamath (ed). (1993) *The Aryan Problem*. Bharatiya Itihasa Sankalana Samiti, Pune.
- Deshpande, Madhav M. (1995) "Vedic Aryans, non-Vedic Aryans, and non-Aryans : Judging the linguistic evidence of the Veda", Erdosy (ed). pp.67-84.
- Deshpande, Madhav M. and Peter E. Hook (eds) (1979) *Aryan and Non-Aryan in India*. University of Michigan, Ann Arbor.
- Dhavalikar, Madhukar Keshav (1995) *Cultural Imperialism : Indus Civilization in Western India*. Books & Books, New Delhi.
- Disotell, Todd R. (1999) "The southern route to Asia", *Current Biology* 9(24) : R925-R928.
- Dolgopolsky, A. (1988) "The Indo-European homeland and lexical contacts of Proto-Indo-European with other languages", *Mediterranean Language Review* 3 : 7-31.
- Dolgopolsky, A. (1993) "More about the Indo-European homeland", *Mediterranean Language Review* 6-7 : 230-248.
- During Caspers, Elisabeth C. L. (1996) "The reliability of archaeological evidence for mercantile/intercultural contacts between Central and South Asia, the Arabian Gulf, and the Near East in the late third and early second millennia B.C.", *Mitra* (ed). pp.123-156.
- Edens, C. (1993) "Indus-Arabian interaction during the Bronze Age : A review of the evidence", *Posehl* (ed). pp.335-363.

- Elst, Koenraad (1993) *Indigenous Indians*. Voice of India, New Delhi.
- Elst, Koenraad (1999) *Update on the Aryan Invasion Debate*. Aditya Prakashan, New Delhi.
- Enzel, Y., L.L. Ely, S. Mishra, R. Ramesh, R. Armit, B. Lazar, S.N. Raiaguru, V.R. Baker, A. Sandler (1999) "High-resolution Holocene environmental changes in the Thar Desert, Northwestern India", *Science* 284(5411): 125-128.
- Erdosy, George (1989) "Ethnicity in the Rgveda and its bearing on the question of Indo-European origins", *South Asian Studies* 5: 34-47.
- Erdosy, George (1994) "The meaning of Rigvedic pur: Notes on the Vedic landscape", Kenoyer (ed). pp.223-234.
- Erdosy, George (1995) "Language, material culture and ethnicity: theoretical perspectives", Erdosy (ed). pp.1-31.
- Erdosy, George (ed). (1995) *The Indo-Aryans of Ancient South Asia: Language, Material Culture and Ethnicity*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Fairservice Jr., Walter A. (1995) "Central Asia and the Rgveda: The archaeological evidence", Erdosy (ed). pp.206-212.
- Feuerstein, G., Subhash Kak and David Frawley (1995) *In Search of the Cradle of Civilization*. Quest Books, Wheaton.
- Francfort, Henri-Paul (1992) "Dungeons and dragons: reflections on the system of iconography in protohistoric Bactria and Margiana", G. Possehl (ed). pp.179-208.
- Franke-Vogt, Ute (1993) "The Harappans and the west: some reflections on Meluhha's relations to Magan, Dilmun and Mesopotamia", *Bulletin of Archaeology, The University of Kansas* 20: 72-101.
- Frawley, David (1994) *The Myth of the Aryan Invasion of India*. Voice of India, New Delhi.
- Gail, Adalbert J. and Gerd J.R. Mevissen (eds). (1993) *South Asian Archaeology 1991*. Franz Steiner Verlag, Stuttgart.
- Gamkrelidze, T. (1990) "On the problem of an Asiatic original homeland of the Proto-Indo-European", T. L. Markey and J. Greppin (eds). pp.5-14.
- Gamkrelidze, T. and I. Ivanov (1995) *Indo-European and the Indo-Europeans*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Geldner, Karl F. (1951) *Der Rig-Veda*. 3 Vol. Harvard University Press, Cambridge.
- Ghosh, B.K. (1965) "The Aryan problem", R.C. Majumdar and A.D. Pusalker (eds). *History and Culture of the Indian People*. Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay.
- Gimbutas, M. (1997) *The Kurgan Culture and the Indo-Europeanization of Europe*. Institute for the Study of Man, Washington D.C.
- Glassner, Jean-Jacques (1996) "Dilmun, Magan and Meluhha: some observations on language, toponymy, anthroponymy and theonymy", Reade (ed). pp.235-248.
- Gopal, S., Romila Thapar, K.N. Panikkar & N. Bhattacharya (1992)

The Political Abuse of History : Babri Masjid-Ram Janmabhumi Dispute. Centre for Historical Studies JNU, New Delhi.

後藤健 (一九九六) 「インダス・湾岸における都市文明の誕生」金関 恕・川西宏幸編『講座文明と環境 4 都市と文明』。六三―八五頁。朝倉書店。

後藤健 (一九九七) 「アラビヤ湾岸における古代文明の成立」『東京国立博物館紀要』三三：一一―一四四。

Gupta, S. P. (1995) *The "Lost" Sarasvati and the Indus Civilization*. Kusumanjali Prakashan, Jodhpur.

Gupta, S. P. (1999) "The Indus-Sarasvati civilization : beginnings and developments", Pande(ed). pp.269-375.

Gupta, S. P. (1996) *The Indus-Sarasvati Civilization*. Pratibha Prakashan, Delhi.

Hansel, Bernhard and Stefan Zimmer (eds). (1994) *Die Indogermanen und das Pferd*. Archaeo-lingua, Budapest.

Harris, David R. (ed). (1996) *The Origins and Spread of Agriculture and Pastoralism in Eurasia*. Smithsonian Institution Press, Washington D.C.

服部四郎 (一九六〇) 『言語学の方法』東洋書店。

Hemphill, Brian and John R. Lukacs (1993) "Hegelian logic and the Harappan civilization : an investigation of Harappan biological affinities in light of recent biological and archaeological research", A. J. Gail & G.J.R. Mevissen (eds). pp.101-120.

Hemphill, Brian E., Alexander F. Christensen and S.I. Mustatakulov

(1997) "Trade or travel : an assessment of interpopulational dynamics among Bronze Age Indo-Iranian Populations", Bridget Allchin & Raymond Allchin (eds). pp.855-871.

くへり、スチャート (一九九九) 『民族』：そしてその周辺』『民族学研究』六三 (四) : 四二〇―四二九。

Hiebert, Fredrik T. (1994) *Origins of the Bronze Age Oasis Civilization in Central Asia*. Peabody Museum, Cambridge.

Hiebert, Fredrik T. (1995) "South Asia from a Central Asian perspective", Erdosy (ed). pp.192-205.

Hiebert, Fredrik T. (1998) "Central Asians on the Iranian plateau : a model for Indo-Iranian expansionism", Mair (ed). pp.148-161.

広瀬崇子 (一九九四) 「インダス文明のインディアン・ナシ・ナリメアの台頭―インディアン民族を中心として」『インド学』三三 (三) : 一一―二二。

広瀬崇子 (一九九九) 「インディアン主義とインド・ナシ・ナリメアの『領土インディアン』と『仕事雑誌』」『印度学』一〇五 (四) : 一―一七頁。

Hock, Hans Henrich (1986) *Principles of Historical Linguistics*. Mouton de Gruyter, Berlin.

Hock, Hans Henrich (1999a) "Out of India? The linguistic evidence", Johannes Bronkhorst and Madhav M. Deshpande (eds). pp.1-18.

Hock, Hans Henrich (1999b) "Through a glass darkly : Modern 'racial' interpretations vs. textual and general prehistoric evidence on arya and dasa/dasyu in Vedic society", Johannes Bronk-

- horst and Madhav M. Deshpande (eds). pp.145-174.
- Hock, Hans Henrich & Brian D. Joseph (1996) *Language History, Language Change and Language Relationship: An Introduction to Historical and Comparative Linguistics*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- 堀暁 (一九九〇) 「考古学上から見たインド・ヨーロッパ問題」『古代オリエント博物館紀要』一一
- 堀暁 (一九九五) 「インド・ヨーロッパ民族大移動否定論」『古代オリエント博物館編』江上波夫先生米寿記念論集 文明学原論。一八一―一九一頁。山川出版社。
- Hori Akira (1995) "Proto-Indo-European: a ruined hypothesis", *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 16: 143-152.
- 堀本武功 (一九九六) 「ヒンドゥー主義の逆襲にめめれたインド政治」『世界』六二四: 二〇九―二一八。
- Jansen, Michael and Maire Mulloy, Gunter Urban (eds). (1991) *Forgotten Cities on the Indus: Early Civilization in Pakistan from the 8th to the 2nd Millennium BC*. Verlag Philipp von Zabern, Mainz.
- Jarrige, Catherine, J-F Jarrige, R. Meadow and G. Quivron (eds). (1996) *Mehgarh: Field Reports 1974-1985 from Neolithic Times to the Indus Civilization*. The Department of Culture and Tourism, Government of Sindh, Pakistan.
- Jha, D. N. (1998) *Ancient India: In Historical Outline*. Revised and enlarged edition. Manohar, Delhi.
- Jha, Natwar (1996) *Vedic Glossary on Indus Seals*. Ganga Kaveri, Varanasi.
- Jha, Natwar and N.S. Rajaram (2000) *The Deciphered Indus Script: Methodology, Readings, Interpretations*. Aditya Prakashan, New Delhi.
- 亀井孝 (一九七三) 「いはゆる『言語学的古生物学』の成立」『亀井孝論文集二 日本語系統論のみち』。二四一―二六四頁。吉川弘文館。
- 辛島昇 (一九九二) 『地域からの世界史五 南アジア』朝日新聞社。
- 辛島昇監修 (一九九二) 『読んで旅する世界の歴史と文化 インド』新潮社。
- 辛島昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一 (一九八〇) 『インダス文明』NHKブックス。
- 川田順造 (一九九九) 『民族』概念をめぐって『民族学研究』六三(四): 四五―四六一。
- 風間喜代三 (一九七八) 『言語学の誕生―比較言語学小史』岩波新書。
- 風間喜代三 (一九九三) 『印欧語の故郷を探る』岩波新書。
- Kennedy, Kenneth A.R. (1994) "Identification of sacrificial and massacre victims in archaeological sites: The skeletal evidence", *Man and Environment* 19(1-2): 241-251.
- Kennedy, Kenneth A.R. (1995) "Have Aryans been identified in the prehistoric skeletal record from South Asia? Biological anthropology and concepts of ancient races", Erdosy (ed). pp.32-66.
- Kennedy, Kenneth A. R. (2000) *God-apes and Fossil Men*:

Paleoanthropology of South Asia. University of Michigan Press, Ann Arbor.

Kenoyer, Jonathan M. (1991) "The Indus Valley tradition of Pakistan and Western India", *Journal of World Prehistory* 5: 331-385.

(徐朝龍訳「パキスタンとインド西部におけるインダス流域の先史文化伝統」『茨城大学教養部紀要』二六：九一—一四四。一九九四)

Kenoyer, Jonathan M. (1995) "Interaction systems, specialised crafts and culture change: The Indus Valley Tradition and the Indogangetic Tradition in South Asia", Erdosy (ed), pp.213-257.

Kenoyer, Jonathan M. (1998) *Ancient Cities of the Indus Valley Civilization*. Oxford University Press, Karachi.

Kenoyer, Jonathan M. (ed). (1989) *Old Problems and New Perspectives in the Archaeology of South Asia*. Wisconsin Archaeological Reports 2, Madison.

木村雅昭 (一九九六)「ヒンドゥー原理主義に関する一考察」『法学論叢』一三八 (四・五・六)：一三二—一七六頁。

Kitson, Peter R. (1997) "Reconstruction, typology, and the 'original homeland' of the Indo-European", Jacek Fisiak (ed). *Linguistic Reconstruction and Typology*. pp.183-239. Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

児玉望 (一九九三)「ドラヴィダ語の発見」辛島昇編『ドラヴィダの世界』二三八—二五〇頁。東京大学出版会。

近藤英夫 (一九九四)「インダス文明の興亡と環境変動」安田喜憲・

川西宏幸編『古代文明と環境』一二六—一四六頁。思文閣出版。

近藤英夫 (一九九六)「インダス文明の興亡と画期」伊東俊太郎・安田喜憲編『講座文明と環境二 地球と文明の画期』一二二—一三四頁。朝倉書店。

近藤英夫 (二〇〇〇)『四大文明 インダス文明』NHK出版。

近藤光博 (一九九八)「ヒンドゥー・ナショナリズムの偏在—RSSとBJP」『海外事情』七・八：二〇—三五

近藤光博 (一九九九a)「ヒンドゥー・ナショナリズム言説におけるカリ・ユガ」『歴史学研究』七二二：二三—三四。

近藤光博 (一九九九b)「ヒンドゥー・ナショナリストの『一神教』批判」『宗教研究』三二〇：一〇—一二三。

小西正捷 (一九七七)「インダス文明の解体」『古代文明の謎と発見二 幻の大陸と死の都』九五—一五七頁。毎日新聞社。

小西正捷 (一九九九)「インダス文明論」『岩波講座世界歴史六 南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』二〇三—二二四頁。岩波書店。

小西正捷・近藤英夫 (一九九六)「南アジア『暗黒時代』の解明—紀元前一〇〇〇年代のダイナミクス」安田喜憲・林俊雄編『講座文明と環境5 文明の危機—民族移動の世紀』一二—一二六頁。朝倉書店。

小谷汪之 (一九九三)『ラーム神話と牝牛—ヒンドゥー復古主義とイスラム』平凡社。

クラエ、H. 下宮忠雄訳。(一九七〇)『言語と先史時代』紀伊国屋書店。

- Krell, Kathrin S. (1998) "Gimbutas' Kurgan-PIE homeland hypothesis: a linguistic critique", R. Blench & M. Spriggs (eds), pp.267-282.
- Kuiper, F.B.J. (1991) *Aryans in the Rigveda*. Rodopi, Amsterdam.
- Kuzmina, E.E. (1994) "Horses, chariots and the Indo-Iranians: An archaeological spark in the historical dark", Asko Parpola & P. Koskikallio (eds), pp.403-412.
- Lahiri, Nayanot (1992) *The Archaeology of Indian Trade Routes Up to c.200 BC: Resource Use, Resource Access and Lines of Communication*. Oxford University Press, Delhi.
- Lal, B.B. (1997) *New Light on the Indus Civilization*, Aryan Books International, Delhi.
- Leach, Edmund (1990) "Aryan invasions over four millennia", Emiko Ohnuki-Tierney (ed). *Culture Through Time Anthropological Approaches*. pp.227-245. Stanford University Press, Stanford.
- Lehmann, W.P. (1992) *Historical Linguistics*. Third edition. Routledge, London.
- Leopold, J. (1970) "The Aryan theory of race in India 1870-1920, nationalist and internationalist visions", *Indian Economic and Social History Review* 7(2): 271-298.
- Leopold, J. (1974) "British applications of the Aryan theory of race to India 1850-1870", *The English Historical Review* 89: 578-603.
- Leopold, J. (1987) "Ethnic stereotypes in linguistics: the case of Friedrich Max Muller (1847-51)", Aarsleff, Kelly and Niederehe (eds). *Papers in the History of Linguistics*. pp.501-512. John Benjamins, Amsterdam.
- Lukacs, J.R. (ed). (1984) *The Peoples of South Asia*. Plenum Press, New York.
- Lyomnet, B. (1994) "Central Asia, the Indo-Aryans and the Indo-Iranians: Some reassessments from recent archaeological data", Asko Parpola & P. Koskikallio (eds), pp.425-434.
- MacDonnell, Arthur Anthony and Arthur B. Keith (1912) *Vedic Index of Names and Subjects*. 2 Vol. London.
- 岡田豊田 (1900) 「古代インドの歴史概論」『古史叢書』八七: 一
六七-一七九
- フッケイ・シュロニイ。宮坂有勝・佐藤任記 (一九八四) 『インダス文明の謎』山喜房公書林。
- Mackay, Ernest (1937-38) *Further Excavations at Mohenjo-daro*. Delhi.
- Mair, Victor H. (1995) "Prehistoric caucasoid corpses of the Tarim basin", *Journal of Indo-European Studies* 23(3-4): 281-307.
- Mair, Victor H. (1998) "Die Sprachnöbe: an archeolinguistic parable", Mair (ed). pp.835-855.
- Mair, Victor H. (ed). (1998) *The Bronze and Early Iron Age Peoples of Eastern Central Asia*. 2 Vols. Institute for the Study of Man, Washington D.C.
- Mallory, J. P. (1989) *In Search of the Indo-European*. Thames & Hudson, London.

- Mallory, J. P. (1996) "The Indo-European homeland problem : a matter of time", K.J.Bley and M.E. Huld (eds). *Indo-Europeanisation of Northern Europe*. pp.1-22. Institute for the Study of Man, Washington D.C.
- Mallory, J. P. (1997) "The homelands of the Indo-Europeans", Blench, Roger & Matthew Spriggs (eds). pp.93-121.
- Mallory, J. P. (1998) "A European perspective on Indo-Europeans in Asia", Mair (ed). pp.175-201.
- Mandal, D. (1993) *Ayodhya : Archaeology After Demolition*. Oriental Longman, New Delhi.
- Markey, G.T. and J. Greppin (eds). (1990) *When Worlds Collide : Indo-Europeans and Pre-Indo-Europeans*. Karoma Publishers, Ann Arbor.
- Meadow, Richard H. (1987) "Faunal exploitation patterns in eastern Iran and Baluchistan : a review of recent investigations", G. Gnoli (ed) *Orientalia Josephi Tucci memoriae dicata*. pp.881-916. Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Orientale, Rome.
- Meadow, Richard H. (1996) "The origins and spread of agriculture and pastoralism in north-western South Asia", David R. Harris (ed). pp.390-412.
- Meadow, Richard H. and Jonathan Mark Kenoyer (2000) "The Indus valley mystery : one of the world's first civilizations is still a puzzle", *Discovering Archaeology* 8. (<http://www.discoveringarchaeology.com/0800toc/8feature1-indus.shm>)
- Meadow, Richard H. and Ajita Patel (1997) "A comment on 'horse remains from Surkotada' by Sandor Bökönyi", *South Asian Studies* 13 : 308-315.
- Meid, W. (1989) "The Indo-Europeanization of Old European concepts", *Journal of Indo-European Studies* 17 : 297-307.
- Misra, Satya Swarup (1992) *The Aryan Problem : A Linguistic Approach*. Munshiram Manoharlal, New Delhi.
- Mitra, Debala (ed). (1996) *Explorations in Art and Archaeology of South Asia : Essays Dedicated to N. G. Majumdar*. Directorate of Archaeology and Museum, Calcutta.
- 護雅夫 (一九八四) 『人間の世界歴史七 草原とオアシスの人々』三省堂。
- 森本哲郎編 (一九七九) 『インダス文明とガンジス文明』集英社。
- 宗臺秀明 (一九九七) 「ペローチースターン農耕文化とその展開」『物質文化』六二：一一一一。
- 内藤雅雄 (一九九八) 「インダスの民主主義とヘンリッシャー原理主義」古賀正則・内藤雅雄・中村平治編『現代インダスの展望』四〇—七三頁。岩波書店。
- Nandy, A. (1995) *Creating a Nationality : The Ramjanmabhumi Movement and Fear of the Self*. Oxford University Press, New Delhi.
- Newberry, John (1994) *Munda Hieroglyphics*. Private copy.
- Nichols, Johanna (1992) *Linguistic Diversity in Space and Time*. The

University of Chicago Press, Chicago.

Nichols, Johanna (1997a) "Modeling ancient population structures and movement in linguistics", *Annual Review of Anthropology* 26 : 359-384.

Nichols, Johanna (1997b) "The epicentre of the Indo-European linguistic spread", R. Blench & M. Spriggs (eds), pp.122-148

Nichols, Johanna (1998a) "The Eurasian spread zone and the Indo-European dispersal", R. Blench and M. Spriggs (eds), pp.220-266.

Nichols, Johanna (1998b) "The origin and dispersal of languages: linguistic evidence", Jablonski & Aiello (eds), *The Origin and*

Diversification of Language. 127-170. California Academy of Science, San Francisco.

小川 典 (一九九九) 『コンゼンター・ナショナルリズムの台頭』ZET出版。

オランダール・モーリス。訳 (一九九五) 『ヒンズの國の言語』法政大学出版局。

Olmsted, G. (1993) "Date and origin of Proto-Indo-European culture", *Actes du XIIe Congrès International des Sciences Préhistoriques et Protohistoriques* 3 : 86-92.

Olmsted, G. (1999) "Archaeology, social evolution, and the spread of Indo-European languages and cultures", Edgar C. Polomé (ed), *Miscellanea Indo-Europea*. pp.75-116. Institute for the Study of Man, Washington D.C.

長田俊樹 (一九九七) 「マンダ語族比較言語学研究序論」『日本研究』

一六：二八八—二六七。

長田俊樹 (一九九八) 「比較言語学・遠隔系統論・多角比較—大野教授の反論を讀む」『日本研究』一七：四〇四—四三三。

Pande, G.C. (ed), *The Dawn of Indian Civilization (up to c. 600 BC)*.

Centre for Studies in Civilization, New Delhi.

Parpola, Asko (1988) "The coming of the Aryans to Iran and India and the cultural and ethnic identity of the Dasas", *Studia Orientalia* 64 : 195-302.

Parpola, Asko (1993) "Bronze age Bactria and Indian religion",

Studia Orientalia 70 : 81-87.

Parpola, Asko (1994) *Deciphering f the Indus Script*. Cambridge University Press, Cambridge.

Parpola, Asko (1995) "The problem of the Aryans and the Soma: Textual-linguistic and archaeological evidence", Erdosy (ed). pp. 353-381.

Parpola, Asko (1997) "The Aryan languages and archaeology with an excursus on Bontaj", Raymond & Bridget Allchin (eds), *South Asian Archaeology*, 1995. pp.291-308. Oxford & IBH, Delhi.

Parpola, Asko (1998) "Aryan languages, archaeological cultures, and Sinkiang: Where did Proto-Iranian come into being and how did it spread?", Victor H. Mair(ed), 1 : 114-147.

Parpola, Asko (1999) "The formation of the Aryan branch of Indo-European", Roger Blench and Matthew Spriggs (ed). (1998b) pp. 180-207.

- Parpola, Asko (Forthcoming) "Vedic and the entry of Indo-Aryans in India", Nicholas Sims-Williams (ed), *Indo-Iranian Languages and Peoples*.
- Parpola, Asko (ed). (1991) *Corpus of Indus Seals and Inscriptions*. Helsinki.
- Parpola, Asko and P. Koskikallio (eds). (1994) *South Asian Archaeology 1993*. Suomalainen Tiedekatemia, Helsinki.
- ボリフコン・ンナン。フリープ主義研究会訳。(一九八五)『フリープ神話：ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』法政大学出版局。
- Possehl, Gregory (1996a) *The Indus Age : The Writing System*. Oxford & IBH, Calcutta.
- Possehl, Gregory (1996b) "Meluhha", Julian Reade(ed). pp.133-208.
- Possehl, Gregory (1997a) "The transformation of the Indus civilization", *Journal of World Prehistory* 11 : 425-472.
- Possehl, Gregory (1997b) "Climate and the eclipse of the ancient cities of the Indus", H.N. Dalfes, G. Kukla and H. Weisse (eds). *Third Millennium BC Climate Change and Old World Collapse*. pp133-243. Springer-Verlag, Berlin.
- Possehl, Gregory (1999) *Indus Age : The Beginnings*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Possehl, Gregory (ed). (1992) *South Asian Archaeology Studies*. Oxford & IBH, New Delhi.
- Possehl, Gregory (ed). (1993) *Harappan Civilization : A Recent Perspectives*. Second edition. Oxford & IBH, New Delhi.
- Radhakrishna, B.P. and Mehr, S. S. (eds). (1999) *Vedic Sarasvati*. Geological Society of India, Bangalore.
- Rajaram, Navarathna S.(1993) *Aryan Invasion of India, the Myth and the Truth*. Voice of India, Delhi.
- Rajaram, Navarathna S.(1995) *The Politics of History : Aryan Invasion Theory and the Subversion of Scholarship*. Voice of India, New Delhi.
- Rajaram, Navarathna S.(1997) *From Harappa to Ayodhya*. Sahitya Sindhu Prakashana, Bangalore.
- Rajaram, Navarathna S.(1998) *From Sarasvati River to Indus Script*. Diganta Sahitya, Mangalore.
- Rajaram, Navarathna S. and David Frawley (1995) *Vedic Aryan and the Origins of Civilization : A Literary and Scientific Perspective*. World Heritage Press.
- Rao, N. (1994) "Interpreting silences : symbol and history in the case of Ram Jannabhoomi/ Babri Masjid", Bond & Gilliam (eds). *Social Construction of the Past : Representation as Power*. pp.154-164.
- Rao, S. R. (1982) *The Decipherment of the Indus Script*. Asian Publishing House, Bombay.
- (骨子)ついでにその日本語訳がある。佐藤任訳「インダス文字の解説」『ヒロシイ・マッケイ。宮坂・佐藤訳「インダス文明の謎」山喜房仏書林。一七五—二二七頁)

- Rao, S.R. (1992) *Dawn and Devolution of the Indus Civilization*. Aditya Prakashan, Delhi.
- Ratnagar, Shereen (1994) "Harappan trade in its 'world' context", *Man and Environment* 19(1-2): 115-127.
- Ratnagar, Shereen (1999) "Does archaeology hold the answer?", Johannes Bronkhorst and Madhav M. Deshpande (eds). pp.207-238.
- Ratnagar, Shereen (2000) *The End of the Great Harappan Tradition*. Manohar, New Delhi.
- Ray, Himanshu Prabha and Jean-Francois Salles (eds). (1998) *Tradition and Archaeology: Early Maritime Contacts in the Indian Ocean*. Manohar, Delhi.
- Reade, Julian (ed). (1996) *The Indian Ocean in Antiquity*. Kegan Paul international, London and New York.
- Renfrew, Colin (1987) *Archaeology and Language: The Puzzle of Indo-European Origins*. Penguin Books, London. (マニッシュ・ナナハル。橋本楓雄訳 (一九九三) 『インドの考古学』 青土社)
- Renfrew, Colin (1998) "The Tarim basin, Tocharian, and Indo-European Origins: A view from the West", Mair (ed). pp.202-212.
- Richter-Ushanas, Egbert (1997) *The Indus Script and the Rig-Veda*. Motilal Banarsidass, Delhi.
- Sarianidi, Victor (1993) "Recent archaeological discoveries and the Aryan problem", Adalbert J. Gail & Gerd J.R. Mevissen (eds). pp. 251-264.
- Sarianidi, Victor (1994) "Margiana and the Indo-Iranian world", Asko Parpola & P. Koskikallio (eds). pp.667-80.
- Sergent, Bernard (1995) *Les Indo-européens: Histoire, Langues, Mythes*. Payot, Paris.
- Sergent, Bernard (1997) *Genèse de l'Inde*. Payot, Paris.
- Sethna, K.D. (1992) *The Problem of Aryan Origins*. Aditya Prakashan, Delhi.
- Shaffer, Jim G. (1984) "The Indo-Aryan invasions: cultural myth and archaeological reality", J.L. Lukacs (ed). pp.74-90.
- Shaffer, Jim G. (1992) "Indus Valley, Baluchistan and the Helmand traditions: Neolithic Bronze Age", R.W. Ehrich (ed). *Chronologies in Old World Archaeology*. 1: 441-464, 2: 425-446. University of Chicago Press, Chicago.
- Shaffer, Jim G. and Diane A. Lichtenstein (1989) "Ethnicity and change in the Indus valley cultural tradition", J.M. Kenoyer (ed). pp.117-126.
- Shaffer, Jim G. and Diane A. Lichtenstein (1995) "The concepts of 'cultural tradition' and 'palaeoethnicity' in South Asian archaeology", Erdosy (ed). pp.126-154.
- Shaffer, Jim G. and Diane A. Lichtenstein (1999) "Migration, Philology and South Asian archaeology", Johannes Bronkhorst and Madhav M. Deshpande (eds). pp.239-260.
- Sharma, Arvind (1995) "The Aryan question: Some general considerations", Erdosy (ed). pp.177-191.

Sharma, A.K. (1974) "Evidence of horse from the Harappan settlement at Surkotada", *Puratatva* 7 : 75-76.

Sharma, A.K. (1993) "The Harappan horse was buried under the dunes of...", *Puratatva* 23 : 30-34.

Sharma, A. K. (1999) *The Departed Harappans of Kalibangan*. Sundep Prakashan, New Delhi.

Sharma, Bhu Dev and Nabarun Chose (1998) *Revisiting Indus-Saraswati Age and Ancient India*. World Association for Vedic Studies, Atlanta.

Sharma, R.S. (1995) *Looking for the Aryans*. Oriental Longman, Delhi.

Sharma, R. S. (1999) *Advent of the Aryans in India*. Manohar, Delhi.

Shaw, Julia (2000) "Ayodhya's sacred landscape : ritual memory, politics and archaeological 'fact' ", *Antiquity* 74 : 693-700.

Shenqe, J. M. (1996) *The Aryans. Facts without Fancy and Fiction*. Abhinav, New Delhi.

Sherratt, Andrew (1999) "Echoes of the big bang : the historical context of language dispersal", *Proceedings of the Tenth Annual UCLA Indo-European Conference* 261-282.

Sherrett, Andrew and Susan Sherrett (1988) "The archaeology of Indo-European : an alternative view", *Antiquity* 62 : 584-595.

Shishlina, Natalia I. and Fredrik T. Hiebert (1998) "The steppe and the sown : interaction between Bronze Age Eurasian nomads and agriculturalists", Mair (ed). pp.222-237.

Sidharth, B.G. (1999) *The Celestial Key to the Vedas : Discovering the Origins of the World's Oldest Civilization*. Inner Traditions International.

Singh, Bhagwan (1995) *The Vedic Harappans*. Aditya Prakashan, Delhi.

曾野寿彦 (一九七〇) 「インダスの古代文明」『沈黙の世界史八 死者の国・殭屍の国』一三—一三六頁。新潮社。

Southworth, Franklin C. (1995) "Reconstructing social context from language : Indo-Aryan and Dravidian prehistory", Erdosy (ed). pp. 258-277.

Stacul, G. (1994) "Neolithic Inner Asian tradition in northern Indo-Pakistani valleys", A. Parpola and Koskikallio (eds). pp.707-714.

竹沢泰子 (一九九九) 「『人種』と生物学的概念から排他的世界観へ」『民族学研究』六三 (四) : 四三〇—四五〇°

Talageri, S.G. (1993) *The Aryan Invasion Theory : A Reappraisal*. Aditya Prakashan, New Delhi.

Talageri, S.G. (1994) *Aryan Invasion and Indian Nationalism*. Voice of India, New Delhi.

Thakurta, T.G. (1996) *Archaeology As Evidence : Looking Back From the Ayodhya Debate*. Centre for Studies in Social Science, Calcutta.

Thapar, Romila (1994) "Communalism and the Writing of Indian History", *Selected Writings on Communalism*. Peoples Publishing House. pp.1-18.

- Thapar, Romila (1996) "The theory of Aryan race and India", *Social Scientist* 24(1-3): 3-29.
- Thapar, Romila (2000) "Hindutva and history: why do Hindutva ideologues keep flogging a dead horse", *Frontline* 17(20): 1-3.
- Tieme, Paul (1960) "The 'Aryan' gods of the Mitanni treaties", *Journal of the American Oriental Society* 80: 301-317.
- Tosi, M. (1993) "The Harappan civilization beyond the Indus Valley", Posehl (ed). pp.365-378.
- Trautmann, Thomas R. (1997) *Aryans and British India*. Vistaar, New Delhi.
- Trautmann, Thomas R. (1999) "Constructing the racial theory of Indian civilization", Johannes Bronkhorst and Madhav M. Deshpande (eds). pp.277-293.
- Trubetzkoy, N. (1939) "Gedanken über das Indogermanenproblem", *Acta Linguistica* 1: 81-89.
- 津田元一郎 (一九九〇) 『アーリアンとは何かーその虚構と真実ー』人文書院。
- 辻直四郎 (一九六七) 『インド文明の曙』岩波新書。
- 辻直四郎 (一九七〇) 『リグ・ヴェーダ賛歌』岩波文庫。
- 角田文衛 (一九七八) 「インド・ヨーロッパ人の起源と拡汎：ユーラシア世界の転換」『古代文明の謎と発見』〇 征服と遠征。三三一九〇頁。毎日新聞社。
- Vogt, Burkhard (1996) "Bronze age maritime trade in the Indian Ocean: Harappan traits on the Oman peninsula", Reade, Julian (ed). pp.107-132.
- Waradpande, N. R. (2000) *The Mythical Aryans and Their Invasion*. Books & Books, New Delhi.
- Weber, Steven (1991) *Plants and Harappan Subsistence: An Example of Stability and Change from Rojdi*. Oxford & IBH, New Delhi.
- Weber, Steven (1996) "Distinguishing change in the subsistence and the material records: the interplay of environment and culture", *Asian Perspectives* 35(2): 155-164.
- Weber, Steven (1998) "Out of Africa: the initial impact of millets in South Asia", *Current Anthropology* 39(2): 267-274.
- Weber, Steven (1999) "Seeds of urbanism: palaeobotany and the Indus Civilization", *Antiquity* 73: 813-826.
- ウェーラー、R・E・M。曾野寿彦訳。(一九六六)『インダス文明』みすず書房。
- ウェーラー、R・E・M。小谷仲男訳。(一九七二)『インダス文明の流れ』創元社。
- Wheeler, R.E.M. (1947) "Harappa 1946: the defenses and cemetery R-37", *Ancient India* 3: 58-130.
- Witzel, Michael (1995a) "Early Indian history: Linguistics and textual parameters", Erdosy (ed). pp.85-125.
- Witzel, Michael (1995b) "Ryvedic history: poets, chieftains and politics", Erdosy (ed). pp.307-352.
- Witzel, Michael (1999a) "Aryan and non-Aryan names in Vedic India. Data for the linguistic situation, c. 1900-500 BC.", Johannes

Bronkhorst and Madhav M. Deshpande (eds). pp.337-404.

Witzel, Michael (1998b) "Substrate languages in old Aryan (Rgvedic, middle and late Vedic)", *Electric Journal of Vedic Studies* 5(1).
(<http://www.asiatica.org/publications/ejvs/>)

Witzel, Michael and Steve Farmer (2000) "Horseplay in Harappa: the Indus Valley decipherment hoax", *Frontline* 17(20): 4-14.

徐朝龍 (Xu Chaolong) (一九九二)「インダス文明起源の問題―矛盾とその源―」『史林』七四 (三) : 九七―一三〇。

徐朝龍 (一九九二)「バルーチスターン初期農耕文化の問題 (1)―KGM彩文土器群を中心に―」『茨城大学教養部紀要』二四 : 三五―一三八四。

徐朝龍 (一九九五)「Kot Digi文化の起源に関する考察」『茨城大学教養部紀要』二八 : 一―三六。

徐朝龍 (一九九六)「インダス文明―その盛衰の道」, 安田喜憲・林俊雄編『講座文明と環境五 文明の危機―民族移動の世紀』。九九―一―頁。朝倉書店。

Xu, Chaolong (1994) "Cultural changes in Sindh prior to the Mature Harappan period? A clue drawn from a comparative study of the pottery", Kenoyer (ed). pp.59-70.

Xu, Wenkan (1995) "The discovery of the Winjiang mummies and studies of the origin of the 'Tocharians'", *Journal of Indo-European Studies* 23 : 357-369.

山崎元一 (一九九七)『世界の歴史三 古代インドの文明と社会』中央公論社。

安田喜憲 (二〇〇〇)「縄文文明こそ日本文明」『ボイス』七月号 : 一五〇―一五七。

Zimmer, F. (1988) "On dating Proto-Indo-European : a call for honesty?", *Journal of Indo-European Studies* 16 : 371-375.